

AI 活用スタートアップガイド

- 小学校の先生方へ -

作成：茨城工業高等専門学校 佐藤桂輔 研究室

2025 年 2 月 4 日発行 (Ver 1)

協力：ChatGPT や Claude をはじめとする大規模言語モデル

Cohere For AI (Cohere の非営利研究機関) による研究助成プログラムの支援を受けた「日本の高等専門学校における AI 活用教育プロジェクト」の知見に基づいています。

supported by a Cohere For AI research grant (the non-profit research lab at Cohere)

本ガイドで紹介する事例やコラムは、すべて架空のものです。実在の学校や個人とは一切関係ありません。これらの事例は、AI の活用方法をより具体的にイメージしていただくために作成されたものであり、実際の現場での参考例として捉えていただければ幸いです。

©2025 佐藤桂輔 研究室.

本資料の全部または一部を引用・転載する場合は、出典を明記してください。(学術・教育目的での利用歓迎)

第1章：はじめに	5
1-1. AI とは何か？	5
1-2. 小学校現場で AI を活用する理由	6
1-3. AI を活用する際の注意点	7
1-4. 本ガイドの使い方	9
第2章：AI を使ってみよう	12
2-1. まずは気軽に話しかけてみましょう	12
2-2. より良い回答を引き出すコツ	14
2-3. 段階的に対話を深める方法	16
2-4. 回答の見方とブラッシュアップ	17
2-5. トラブルシューティング	19
2-6. 小さな成功体験から始めよう	21
第3章：教科指導での活用	24
3-1. 国語科での活用	24
3-2. 算数科での活用	26
3-3. 理科・生活科での活用	27
3-4. 社会科での活用	29
3-5. 音楽・図工・家庭科などの活用ヒント	31
3-6. 総合的な学習の時間（探究学習）	33
3-7. まとめ：教科を超えた学びへ	35
第4章：児童指導・学級経営での活用	37
4-1. 児童との対話：多様な視点との出会い	37
4-2. 保護者との連携：信頼関係を築く	39
4-3. 学級通信：心をつなぐメッセージ	40

4-4. 学級経営での活用：多角的なアプローチ	42
4-5. 予防的な生徒指導とリスク管理	44
第5章：校務での活用	47
5-1. 会議資料づくり：ポイントを押さえてスマートに	47
5-2. 文書作成：使える例文集	48
5-3. 校務の効率化：時間を生み出す工夫	50
5-4. 次年度への見通し：計画的な校務運営	52
5-5. まとめ：手際よく、でも丁寧に	53
第6章：注意点とリスク管理	56
6-1. 個別最適な学びへのアプローチ	56
6-2. 課題解決型・探究学習でのシーン	57
6-3. 協働学習やグループ活動のサポート	59
6-4. 教科横断的・学校全体での取り組み	61
6-5. さらに一步進んだ使い方：生成 AI+α	63
6-6. 実践例 Q&A：現場の声に答えて	65
6-7. まとめ：未来への可能性と学び続ける姿勢	68
第7章：注意点とリスク管理	70
7-1. プロローグ：ある職員室での会話	70
7-2. 個人情報の取り扱い：絶対に譲れない原則	70
7-3. 著作権への配慮：創造性と正しい利用	72
7-4. 情報の正確性の確認：ファクトチェックの習慣化	74
7-5. AI 利用の倫理的配慮：教育者としての視点	75
7-6. リスク管理のための具体策	77
7-7. まとめ：バランスの取れた活用に向けて	79

第 8 章：Q&A 集.....	81
8-1. Q&A：ChatGPT の導入や料金に関する疑問	81
8-2. これからの展望：AI が広げる教育の可能性.....	83
8-3. 本ガイド全体のまとめ	85
8-4. エピローグ：学び合う職員室から	87

第1章：はじめに

1-1. AIとは何か？

■「AI（人工知能）」の基本イメージ

最近、「AI（人工知能）」という言葉をよく聞くようになりました。AIとは、簡単にいうと**コンピュータが人間のよう**に**学んだり考えたりする技術**のことを指します。以前は専門家や研究者の領域でしたが、近年の技術進歩によって、私たちの日常生活や教育現場でも取り入れやすくなってきました。

AIにはさまざまな種類がありますが、その中でもいま特に話題になっているのが「**生成AI**」です。

■「生成AI」って何が違うの？

「生成AI」は、ユーザーからの質問（プロンプト）に応じて、**文章や画像などをその場で新しく作り出す**ことが特徴です。たとえば、皆さんもご存知かもしれない「ChatGPT」は代表的な生成AIのひとつ。私たちが投げかけた質問に対して、まるで会話をしているかのように回答を返してくれます。

- **従来の検索エンジン：**

キーワードを入力すると、ウェブ上にある既存のページや情報を一覧表示します。

- **生成AI：**

同じキーワードや質問に対して、「文章をいちから組み立てて」回答を生成してくれます。文章のスタイルや語調を変えてもらうこともでき、まるで人間同士の対話のように進められます。

たとえば、

> 「小学校で英語を教えるときに使えそうなゲームを3つ考えてほしい」

と聞くと、ゲームの具体的なルールや準備物、進め方まで提案してくれることがあります。

■どんな場面で使えるの？

教師の立場から見ると、以下のような「**アイデア収集**」や「**文章作成の下書き**」で、生成AIを活用しやすいでしょう。

- **授業の導入アイデア**

「算数のわり算単元で、子どもが興味を持ちそうな導入例を教えて」

- **学級通信の一言メッセージ**

「年度末の学級通信で、子どもたちの成長を伝える短い文章例をいくつか提案して」

- **校務文書や会議資料の骨子づくり**

「学年会議を効率的に進めるための議題リストと進行方法をまとめて」

ただし、AIの回答を「そのまま使う」のではなく、必ず**教師自身の目で読み直して修正・アレンジ**することが大切です。なぜなら、AIはまだ完璧なわけではなく、現場の状況に合わないアイデアや不正確な情報を返すこともあるからです。

■ 小学校での「これから」の可能性

小学校では、探究的な学習やプログラミング教育など、「考える力」を育む機会が増えています。生成 AI の活用は、教員の負担軽減にとどまらず、**子どもたちが主体的に疑問を解決していくプロセス**を後押しする可能性もあります。たとえば、調べ学習や総合的な学習の時間での「質問づくり」の場面で、子どもと AI が対話をしながら学ぶ方法も考えられるでしょう。

もっとも、子どもが直接 AI を使うには、**安全面や情報モラル**の指導が不可欠です。本ガイドで紹介する内容は、まず教師自身が AI を使いこなし、授業や学級運営で役立てることを想定しています。教職員が AI に慣れ、情報セキュリティや活用上の注意点を十分に理解したうえで、段階的に児童へも応用を広げていくと安心です。

1-2. 小学校現場で AI を活用する理由

小学校の先生方は、日々多忙を極める中で「子どもたちをしっかりと支えたい」「より良い授業をしたい」という思いを常にお持ちではないでしょうか。その実現に向けて、**AI の活用**は大きな力になり得ます。ここでは、小学校において特に期待される 4 つの理由を挙げてみましょう。

■ 1. 教材研究や授業準備の効率化

● アイデア不足をサポート

「算数の面積の学習で、子どもたちの興味を引く導入を考えたい」と思っている中、忙しい中で新しいアイデアを生み出す時間が取れないこともあるでしょう。AI に「面積の概念をわかりやすくする導入例」を聞いてみれば、いくつかのヒントを提案してくれます。そこから着想を得て、**自分の学級に合ったアレンジ**を加えることで、魅力的な授業づくりにつながられます。

● ワークシートや課題づくりの下支え

授業で使うプリントや宿題の文章題も、AI に一度「たたき台」を作ってもらい、教師が手直しする方法があります。

- 例：「小学 3 年生向けに、かけ算の応用問題を 3 問作成して」

- そのままでは難易度や表現が合わない場合、追加指示で「もう少し易しく」「絵をイメージできる場面設定に」などと修正を重ねる。

こうした**素案づくり**を AI に任せるだけでも、作業時間が軽減される可能性があります。

■ 2. 児童一人ひとりへの多様なアプローチ

● つまづきやすいポイントの事前把握

児童の学習指導で、どの単元や項目でつまづきやすいかを AI にあらかじめ聞いてみると、よくある誤解やつまづき事例を提案してくれます。

- 例：「小学 2 年生のかけ算で、子どもたちが勘違いしがちなポイントは？」

- その回答を参考に、授業計画に「ここでミニ確認問題を入れる」「具体物を使った説明を足す」といった工夫ができるかもしれません。

- 特性に合わせた声かけ・指導アイデア

例えば、学習意欲が低下している子、友達とのコミュニケーションが苦手な子などに対して、AI に一般的な対応例を尋ねると、複数のアプローチが返ってきます。もちろん具体的な個人名や詳細状況は入力してはいけませんが、「学年・教科・性格特徴」などを抽象的にまとめた上で聞くことで、指導ヒントを得やすくなるでしょう。

■ 3. 新しい学びの可能性

- 探究的な学習の推進

総合的な学習の時間やプロジェクト学習などで、児童が興味を持ったテーマについて AI に質問しながら調べを深めるという方法が考えられます。

- ただし、小学生が直接 AI を使う場合は「正確性のチェック」「個人情報保護」などのルールをしっかりとった上で実施することが大切。

- そのためには、まず**教師自身が AI を活用しながら、どのように質問すれば良いか・どんな誤情報が混ざる可能性があるか**を経験しておく必要があります。

- 子どもの発想と組み合わせる

AI は言葉を組み合わせるのが得意ですが、決して「創造性のすべて」を代替するわけではありません。

- むしろ、子どもたちが「アイデアを AI に相談してみる→自分で考え直す→クラスで意見交換する」というプロセスを組むと、**多角的に物事をとらえる力が育ちやすくなる**かもしれません。

- AI の提案を鵜呑みにせず、「どこが正しいか・どこを直したいか」を話し合う体験自体が、新しい学びの形となります。

■ 4. 働き方改革・負担軽減

- 事務作業や文書作成のサポート

小学校では、保護者会のお知らせ文や行事のお便り、学年便りなど、文書を作る機会が非常に多いです。

- AI に文章例を出してもらい、それを元に校正・加筆しながら仕上げると、**ゼロから作るより時間を短縮できる**場面も多いでしょう。

- 会議資料の概要を作ったり、議題を整理したりする場面でも、AI に「箇条書きの素案」をまとめてもらうと便利です。

- 教師が子どもたちと向き合う時間の確保

AI の活用によって、日常の書類作成や調べものにかかる時間が削減されれば、その分、授業準備や個別指導、学級づくりに時間とエネルギーを注げます。「IT ツールを活用して生まれた時間を、より教育の本質的な部分に使う」というのが、働き方改革の理想的な方向性です。

1-3. AI を活用する際の注意点

AI は便利な道具ですが、**間違った使い方や認識不足**によって、思わぬトラブルやリスクを生む可能性があります。小学校での活用を考えると、まず押さえておきたい注意点を見ていきましょう。

■ 1. 個人情報・機密情報の取り扱い

● 入力時の注意

AIに相談するとき、**児童や保護者の名前、評価、家庭事情**など、個人を特定できる情報を絶対に入力してはいけません。

- 具体的に「3年1組のA君が……」という表現ではなく、「**小学3年生の男子児童で、授業中に落ち着きがないケース**」といったように**一般化**して相談します。

- 試験問題や、行事の詳細な企画書のように「外部に漏れると困る」情報も入力は厳禁です。

● 自治体や校内ルールの確認

学校や自治体によっては、**セキュリティポリシーやガイドライン**で、より具体的に「入力してはいけない情報」が定められている場合があります。

- 学校のネットワーク利用規定や、教育委員会の指針などに従いながら、安全に活用しましょう。

■ 2. 回答の正確性のチェック

● AIが返す答えは「仮のたたき台」

AI（生成AI）が返す文章は、**言葉のパターンを組み合わせで作っている**ため、どうしても誤情報や中途半端な情報が混ざることがあります。特に以下のようなデータは必ず再確認が必要です。

1. 年号・人数・数値などの正確なデータ
2. 法規や制度、最新の統計情報
3. 歴史や地理の詳細情報（時々、間違った固有名詞が混ざる）

● 教科書や公式サイトとの照合

- 社会や理科など、**教科書に書かれている事実や数値**と異なる場合は、AIの回答ではなく教科書を優先します。
- 児童に配布するプリントなどは、最終チェックで誤りがないかを確実に確認しましょう。

■ 3. 教師の専門性・役割を忘れない

● 「AIに聞けばOK」ではなく、最終判断は教師が

AIが提案したワークシートや指導アイデアは、あくまで**“たたき台”**です。私たち教師は、

1. 学級の子どもたちに合っているか？
2. 学年の目標やカリキュラムと噛み合うか？
3. 実践可能な内容か？

などを考え、必要な修正や工夫を加えていく必要があります。

● 子どもとの「対話」や「観察」は不可欠

AIは事前の学習データに基づいて回答するため、実際の子どもたちの様子まで正確に把握するわけではありません。

- 「児童がどう感じているか」「授業中の反応はどうか」といった**リアルな観察とコミュニケーション**を大切にすることで、AIの提案をより効果的に活かすことができます。

■ 4. 倫理・安全面の配慮

- 差別的・偏見的表現が含まれることも

稀ではありますが、AIの回答に**差別や偏見、ステレオタイプ的な見解**が紛れ込む可能性があります。必ず教師が読んで確認し、問題があれば適切に修正・破棄しましょう。

- 児童には「AIが全て正しいわけではない」ことを伝え、**自分で考え、調べる姿勢**を育む指導も必要です。

- 学校全体のガイドラインとの整合

校長や管理職、教育委員会が発行する「AI活用ガイドライン」「情報セキュリティポリシー」などと**矛盾しない**ように運用しましょう。

- 使い方によっては著作権を侵害したり、肖像権にかかわるデータを入力してしまったりするリスクもあります。自校のルールを必ず確認してください。

〈次の節へ〉

ここまでで、「AIを使うこと自体に大きな可能性がある一方で、正しく使わないとトラブルに発展しかねない」という点を理解いただけたと思います。次の「1-4. 本ガイドの使い方」では、残りの章の構成を簡単にご案内し、どのように読み進めればよいかをお伝えします。

1-4. 本ガイドの使い方

前の節までで、「AIとは何か」「小学校でAIを使うとどんな利点があるか」「どんなリスクや注意点があるか」を大まかに確認しました。

ここでは、本ガイドの各章がどのような内容を取り扱うかを簡単にご紹介し、**先生方が自分の興味やニーズに合わせて読み進められるよう**道しるべを示します。

■ まずは興味のある章から読んでも OK

このガイドは、**順番に読むと体系的に理解できますが、必ずしも通して読む必要はありません**。「今すぐ知りたい」「特に気になる」トピックから読み始めるのもおすすめです。

- たとえば「授業づくりのアイデアが欲しい」という方は、**第3章：教科指導での活用**から。
- 「学級通信や保護者への文書作成に時間がかかって困っている…」という場合は、**第5章：校務での活用**を先にご覧ください。

時間があるときに全体を通読すれば、より広い視点でAI活用を捉えられます。

■ 章ごとの概要

- **第2章：AIを使ってみよう**

はじめにAIと対話する手順や、質問（プロンプト）のコツを解説しています。

「とりあえず試しにやってみたい」という方は、まず第2章を読んでから実際にAIに話しかけてみてください。

- **第3章：教科指導での活用**

国語、算数、理科・社会、生活科など、小学校での具体的な活用例を紹介。

「教材研究やワークシート作りに使えそう」「子どもたちがつまづくポイントを先回りしたい」といった場面のヒント満載です。

- **第4章：児童指導・学級経営での活用**

保護者対応や学級通信づくり、児童への声かけなど、学級経営ならではの悩みをAIがどうサポートできるかをまとめています。

- **第5章：校務での活用**

会議資料や引き継ぎ文書の作成、行事の準備など、事務作業の効率化を目指す内容。

働き方改革にもつながるアイデアが多数載っています。

- **第6章：注意点とリスク管理**

個人情報や著作権、誤情報のリスクなど、安全・安心にAIを使うための重要事項を整理。

「まずここを読んでおきたい」と感じる先生が多いかもしれません。

- **第7章：発展的な活用に向けて**

児童と一緒に探究活動でAIを活かす方法、教科横断的なプロジェクトなど、もう少し先のステップに挑戦したい方向けの章です。

- **第8章：Q&A集**

「AIを導入してみたけれど、こんな疑問が…」 「実際に活用する上で悩む点は？」 など、よくある質問と対応策をまとめています。

■ 学びを深めるための工夫

- **見出しやチェックリスト**を参考に、必要なところだけ拾い読みしても構いません。
- 「事例コラム」や「先生の声」を設けている章では、実際の活用イメージを得やすくなるはずです。
- 全文に目を通す時間が取れない場合も、興味がある部分を一度読んでみて、**実践しながら別の章にも触れる**という流れがおすすめです。

■ ガイドラインや校内研修との連動

本ガイドの内容は、別途配布される「**AI活用ガイドライン**（教職員向け）」や、教育委員会のセキュリティポリシーとあわせて運用することが前提です。

- ガイドラインでは具体的に「入力してはいけない情報」「安全なアカウント管理方法」などを示しています。

- 校内研修での演習や、情報主任・ICT担当への相談を通じて、**自校の実情に合った使い方**を探してみてください。

■ 次章へ進みましょう

これで第1章は終わりです。続く**第2章「AIを使ってみよう」**では、実際にどのように対話を始めるか、どんな言葉投げかけると良い回答が出やすくなるかなど、**具体的な初歩的ステップ**を紹介します。

「AIに何を聞けばいいのかわからない…」 という方や、「操作が不安…」 という方はぜひご覧ください。

それでは、一緒に AI 活用の一歩を踏み出していきましょう。

第2章：AIを使ってみよう

～はじめの一步から効果的な活用まで～

2-1. まずは気軽に話しかけてみましょう

(1) 最初の一步：アカウント準備とアクセス方法

AI（たとえば ChatGPT など）を使うには、まず**アカウント登録**が必要です。

-多くの生成 AI ツールは、メールアドレスや Google アカウント、Microsoft アカウントなどで簡単に登録できます。

-学校のネットワーク環境やセキュリティ上のルールによっては、登録や利用が制限される場合もあるため、事前に ICT 担当や管理職に確認すると安心です。

登録を済ませてログインすると、画面上にチャット形式の入力欄が現れます。ここに質問や要望を書き込むと、AI が回答を返してくれます。

● まずは動かしてみる

- 「言葉を入力してみる → AI からの回答が返ってくる」という**単純な体験**が、初めての方には最も分かりやすいです。
- 難しいことを考えず、**どんな文章が返ってくるかを楽しむつもり**で始めてみるのがよいでしょう。

(2) 「私は小学校の教師です」と伝えるメリット

AI に話しかけると、最初に簡単な**自己紹介**を入れるのはおすすめの方法です。

たとえば、プロンプトとして

「私は〇〇小学校で主に国語を担当している教員です。小学校 4 年生向けに、漢字の学習が楽しくなる導入アイデアを提案してください。」

というように伝えることで、AI は「小学校の国語教師が求めている情報」を前提に回答しようとしています。

● 期待できる効果

1. **回答のレベルや語彙が小学生向けになりやすい**
2. 教科・学年をはっきり示すと、より具体的な事例を提案してくれる
3. 今後の追加質問でも「この先生は国語担当で、4 年生のクラスを見ている」と AI がある程度認識する

これらは**プロンプトの具体化**にもつながり、満足度の高い回答が得やすくなるのです。

(3) どんなことを聞けばいいの？

「具体的に何を質問すればいいかわからない…」という場合は、まず**日常のちょっとした疑問や作業**を AI に頼ってみてください。

- **例 1：学級通信の一言メッセージ**

「今月の学級通信に短い励ましの言葉を入れたいのですが、4年生に向けて考えてもらえますか？」

- **例 2：保護者へのお知らせ文**

「保護者会のお知らせに書く文章を作りたいです。日程は〇月〇日で、時間は…」

- **例 3：係活動や委員会活動のアイデア**

「教室整備係が楽しんで取り組める工夫を知りたいです。子どもたちがやる気を出せそうな目標はありますか？」

最初は簡単な一文の作成や、アイデアの箇条書き程度でも十分。「おもしろいかも」「少し助かった」という感覚を得られるだけでも、活用の第一歩になります。

(4) 丁寧な言葉づかいで対話を始める

AI は道具であり、感情があるわけではありません。しかし、「包丁を大切に扱う料理人」のように、**道具に敬意を払う姿勢**を見せることは、子どもたちへの模範にもなります。

- **たとえば：**

「はじめまして。私は〇〇小学校の担任です。国語の授業で役立つアイデアを教えてくださいませんか？ よろしくお願いします。」

- 回答に対して、「ありがとうございます。とても参考になります。」と返すことで、**言葉づかいのモデル**を子どもたちに示すこともできます。

- **教育者としての意義**

- 児童が AI を使う場面が出てきたときも、**礼儀正しいコミュニケーションの大切さを**伝えやすくなる。
- 「AI だから雑に扱っていい」ではなく、**自分の質問の仕方・言葉づかいが回答の質を左右する**という学びの姿勢が育まれます。

(5) 小さな成功体験を作る大切さ

AI に何かを尋ねてみて、「おお、これは役に立つかも！」と思える瞬間を 1 つでも味わうと、その後の活用意欲がぐんと高まります。

- **難易度を下げた簡単なお願い**

例：「子どもが興味を持ちそうな単純な算数ゲームを考えて」「学年便りの導入文を 2～3 行で」など。

- **結果が出たら実践してみる**

学級通信に実際にそのフレーズを使ってみたり、プリントに提案された文章を加えてみたりすると、**すぐに効果を検証**できます。

- **実践後の振り返り**

どう感じたかをメモし、可能なら同僚とも共有してみましょう。「これならもっと使えるかも」「ここは修正が必要だった」など、次につながる気づきが得られます。

〈次節へ〉

ここでは、まずアカウントを作って気軽に話しかけてみることで、AIとの対話を体験する大切さを紹介しました。次の節(2-2「より良い回答を引き出すコツ」)では、もう一歩進んで、プロンプト(質問文)の工夫や、回答をブラッシュアップする方法を詳しく見ていきましょう。

2-2. より良い回答を引き出すコツ

「最初のやりとりはしてみたけれど、回答がいまいちピンとこない…」ということはありませんか？ AIは、与えられた質問(プロンプト)をもとに回答を作り出します。質問の仕方や内容の伝え方によって、出てくる答えは大きく変わります。ここでは、「より現場に即した、使える回答を引き出すためのポイント」を紹介します。

(1) 質問(プロンプト)の具体化

● 抽象的な質問 vs. 具体的な質問

● 抽象的な質問の例:

「楽しい授業のアイデアをください」

これだと回答も漠然としたものになりがちで、何をどうすればいいかが曖昧なままになりやすいです。

● 具体的な質問の例:

「小学3年生の算数(わり算)で、日常生活を題材にした導入のアイデアを3つ提案してください」

こう聞くと、AIは学年や単元、場面の具体性を理解し、よりの確な例を挙げやすくなります。

● 情報をしっかり伝える

- 「どの学年か」「教科は何か」「授業時間は何分か」「教具はどんなものが使えるか」などの情報をあらかじめ伝えると、AIの回答も精度が高くなりやすいです。

- たとえば「校内の図書室を使って」「国語と総合的な学習を組み合わせる」など、具体的な条件を示すことで、AIが前提として考える要素が増え、回答に反映されます。

(2) 指示の仕方によって変わる回答の質

● トーンや形式の指定

AIは、文体や形式を柔軟に変えることができます。下記のように「○○のような文体で」や「箇条書きで、短めの文を」といった指示を追加すると、回答の見やすさが向上します。

● 文体指定の例:

「小学生に伝わるように、優しい言葉づかいで説明してください」

「学級通信に掲載できるよう、保護者向けのあいさつ文風に」

● 形式指定の例:

「箇条書きでポイントを5つ挙げてください」

「100文字程度でまとめてください」

- 「立場」を指定してもらう

AIに「〇〇小学校の担任教師の立場になって考えてください」と伝え、子どもたちとの関わりを想定した回答が出る場合があります。

-逆に「保護者の視点ならどう伝える？」と立場を変えてみると、まったく違う提案が得られることも。

(3) 例：算数導入プリントをつくる場合

具体例として、算数の導入プリントを作成するシーンを考えてみましょう。

1. 大枠を伝える

「私は小学校3年生の担任です。かけ算の導入で使うプリントを作りたいので、子どもが興味を持つような文章問題のアイデアをいくつか提案してください。」

2. 条件や制限を指定する

「1問あたり1~2行程度の短い文章問題にしたいです。なるべく身近な生活場面を例にしてください。」

3. 回答を見て追加要望を出す

「ありがとうございます。もう少し簡単に数字を小さくしてほしいです。あと、場面設定をもう2パターン増やしてもらえますか？」

4. 文体・表現を修正させる

「一人称は『ぼく／わたし』ではなく、『自分』など他の表現に変えてもらえますか？」

こうした段階的なやり取りを重ねると、AIの提案がどんどん現場に近づいていきます。完成後も最終的には自分のクラスに合わせて細かな調整をすることで、実際に使えるプリントが仕上がります。

(4) 「推敲」や「補足」を促すテクニック

- 「別の角度で」「もっと短く」「より感情的に」と伝える

AIが出した答えが「ちょっと物足りない」「文章が長い」と感じたら、追加指示で再提案を求めましょう。

- **たとえば:**

「素晴らしいアイデアですね。もう少し笑い要素を入れた問題文にアレンジできますか？」

「読んでいる子どもたちがワクワクしそうな書き出しに変えてください。」

- 繰り返しの修正が苦にならない仕組み

AIへの「リクエスト」「修正依頼」は何度でも繰り返せるので、試行錯誤を気軽に行えます。

-自分が納得するまでやり取りするうちに、**より良い表現にブラッシュアップ**されていくでしょう。

(5) 丁寧さ+的確さ=より満足できる回答へ

すでに第2章の最初(2-1)でも述べたように、AIには敬意を払いつつ、「具体的な条件」や「希望する文体」をきちんと指示することが大切です。

-**丁寧に礼儀正しく**尋ねることで、教師としての姿勢を示しながら、AIを「単なる機械的ツール」ではなく「教育現場のパートナー」として位置づけられます。

-しかし、頼みたい内容は明確に伝える必要があります。「短く」「箇条書きで」「導入として使いやすいように」など、具体的なキーワードを使えば使うほど、回答の質が上がります。

〈次節へ〉

プロンプト（質問）の仕方で回答がどう変わるか、ご理解いただけただけでしょうか。

次の節(2-3「段階的に対話を深める方法」)では、回答をもらったあとにさらに掘り下げたり、複数回のやり取りで「自分の求めるアイデア」に近づけていくテクニックを紹介します。

「一度の質問で完璧な答えを求めない」という考え方が重要になってきますので、ぜひご期待ください。

2-3. 段階的に対話を深める方法

すでに触れたように、AIから納得のいく回答を得るためには、「一度の質問ですべてを解決しよう」と考えず、**複数回のやり取り（対話）**を積み重ねることが大切です。ここでは、段階的にAIの回答をブラッシュアップしていく流れを3つのステップに分けてご紹介します。

(1) 大まかな方向性の確認

- スタートは「大枠」の質問から

初めてAIに何かを聞くとき、まずは**ざっくりとした方向性**を提示し、幅広いアイデアをもらうのが有効です。

-例：「小学5年生の社会科授業で、子どもたちが主体的に学べる学習活動をいくつか提案してもらえますか？」

-例：「運動会のプログラムを短時間で進めたいのですが、時間短縮のための工夫案を教えてください。」

この最初の質問で返ってきた回答を読むと、「なるほど、こういう切り口もあるのか」「これは自分が想定していない案だった」といった新たな発見があるかもしれません。

- 「うちのクラスでは…」という簡単な背景説明

「クラスの子どもたちは活動が好きだが、座学が苦手」などの**背景要素**を加えておくと、AIが回答の方向性をつかみやすくなります。

(2) 具体化・修正のやり取り

- まずAIの提案を受け止める

大枠の回答を確認したら、**良さそうな部分**と**不十分な部分**を区別しましょう。

- 「これは面白いけど、時間がかかりそう」

- 「子どもたちにやや難しいかもしれない」

- 繰り返し質問を重ねる

そのうえで、AIに追加の指示を出します。

-例：「先ほどのアイデアの中で、難易度をもう少し下げたバージョンを提案してほしい」

-例：「30分以内に終わる活動例に絞って教えてください」

-例：「道具の準備があまり必要ないもの限定してもらえますか？」

AIにこうした修正依頼を出すと、**最初の回答をベースに再提案**してくれます。これを何度か繰り返すことで、段階的に現場に合った案に近づいていくのです。

(3) 最終チェックと仕上げ

- 全体の整合性をチェック

最終的に AI が提示したアイデアや文章を、**学習指導要領や教科書、学校の実態**に照らし合わせて確認します。

- 「このアクティビティは実施時間内に収まるか？」
- 「著作権的に問題はないか？」
- 「クラスの特性や人数に合っているか？」

- 教師の目を通してブラッシュアップ

子どもたちに渡すプリントや指導案を完成させる前に、**自分の言葉や表現**に置き換えたい部分を修正しましょう。

- 実際の児童の名前や学級の雰囲気や踏まえた具体例を加えると、よりリアリティが増します。
- 文末の調整や言葉のレベルの統一など、**最後は教師が責任をもって仕上げる**のが重要です。

- リアルな場面で試してフィードバック

完成した案を実際に授業や学級経営で使ってみたら、**その結果を次の AI 活用にフィードバック**しましょう。

- 「実際に試してみたら、どの程度うまくいったか」
- 「どの部分が子どもたちに響いたか、逆に合わなかったか」
- これらの経験をもとに、次回 AI に相談するときは「こういう条件を前提にしてほしい」と、よりの確な指示ができるようになります。

■ まとめ：試行錯誤しながら AI を味方に

1 度の質問だけで完璧な答えを得ようとするのではなく、**大枠 → 部分修正 → 仕上げ**という流れで対話を続けることで、AI が出すアイデアは格段に充実していきます。

- ある意味、**AI とのやり取り自体が「授業づくりのプロセス」と**考えられるかもしれません。
- 繰り返し活用しているうちに、教師自身も「どんな情報を AI に伝えるとより使える回答が返ってくるか」を自然に身に付けていくでしょう。

次節（2-4）では、こうした対話の結果生成された **AI の回答**をどのように見極め、さらに**ブラッシュアップすればいいのか**を詳しく解説します。誤情報や曖昧な記述が混ざるリスクもあるため、**確認作業**のポイントが重要になってきます。

2-4. 回答の見方とブラッシュアップ

段階的なやりとりで AI から提案を得ても、**そのまま鵜呑みにするのではなく、最終調整や確認作業は不可欠**です。ここでは、回答を精査しつつ必要に応じて追加の修正を依頼する「**ブラッシュアップ**」の流れを具体的に見ていきましょう。

(1) AI は完璧じゃない：どこを疑う？

- 事実誤認・データの間違い

AI は、膨大な文章データを元に文章を生成しているため、**本来存在しないデータや誤った数値**を提示してしまうことがあります。

- 社会科で地域の人口や産業統計を聞く場合、公式データや教科書など一次情報との照合が必要。
- 理科での実験手順なども、**安全面で不正確**な記述があるかもしれないので要注意。

- 不適切な表現や言葉遣い

稀に、差別的・偏見的表現や、児童に不向きな表現が混ざる可能性があります。

- 教師の目で読み、問題があれば**その箇所を修正または削除**しましょう。

- 著作権の侵害リスク

既存の文章や著作物からの引用が混ざっている場合、どこから引用されたのかが**明確ではない**ことも。

- 学習指導要領や教科書に載っている文章と酷似していないか確認し、必要に応じて**出典を明記**するか、**大幅に書き換える**などの対応が必要です。

(2) 改善のための追質問・再入力

- 「もっとわかりやすく」「表や箇条書きに」など追加指示

回答を読んで、わかりにくい部分があれば、もう一度 AI に頼んで**形式を変えてもらう**ことができます。

- 例：「先ほどの説明を、箇条書きで短めにまとめてください」

- 例：「小学校 4 年生が読んでもわかるように、専門用語は省いてもらえますか？」

- 「追加例」をもらう

AI が出したアイデアに十分納得できなければ、「もう少しバリエーションが欲しい」「他の視点も教えてほしい」と依頼し、回答を**比べながら検討**するとよいでしょう。

(3) 自分なりの判断基準を持つ

- 教科書・公式資料との照合

「AI の提案」と「教科書の解説や公式ウェブサイト」の内容が食い違っていないかは必ず確認します。

- 法律や制度の話、歴史上の出来事などは**公的・信頼できる情報源**でチェックするのが鉄則。

- 特に評価や指導要録に関する文面を AI に作ってもらう場合は、**校内規定・自治体の方針**に違反しないか注意が必要です。

- 同僚や先輩教師との共有

自分だけで判断しきれないときは、職員室や学年会議などで**同僚と一緒に確認**するのも一つの方法。

- 「このワークシート案、どう思う？」と見てもらい、**現場経験が豊富な先生のアドバイス**を得れば、より実践的な修正ができます。

(4) 実際に活用してから最終調整へ

- 教材やワークシートなら、まずは試しに試してみる

AI が提示したプリントやアイデアを**小規模に試してみて**、子どもたちの反応を見ながら微調整するのも良い方法です。

- 例：「休み時間や朝の会に、AI が作ったクイズを簡単に出してみる」

-実践後、「意外と難しかった」「興味は持ったけれど言葉が難しかった」などのフィードバックをもとに、さらに AI に修正を依頼しても OK です。

- 振り返りの共有でスキルアップ

成功事例や改善点を学年内・職員室で共有すると、自分だけでなく**他の先生もノウハウを学べる**ため、校内全体で AI 活用の質が高まっていきます。

〈次節へ〉

AI の回答をブラッシュアップする流れや注意点をまとめました。次の節(2-5「トラブルシューティング」)では、よくあるエラーや想定外の挙動にどう対処すればいいかを具体的に紹介していきます。

「エラーが出て使えない」「同じ質問なのに前回と違う答えが返ってきた」という場面に備え、**スムーズにリカバーするコツ**を押さえておきましょう。

2-5. トラブルシューティング

AI を活用していると、システムエラーや予期せぬ回答が返ってくるなど、さまざまな場面で戸惑うことがあるかもしれません。ここでは、よくあるトラブル例とその対策を紹介します。

(1) 回答が出てこない・エラーが起きたら

- 通信環境の確認

- 学校のネットワーク環境が不安定な場合、AI へのアクセス時にエラーが起きやすいです。
- Wi-Fi の調子や回線速度を確かめ、可能なら別の時間帯や別の端末で試してみましょう。

- サービス側の負荷・メンテナンスの可能性

- 有名な生成 AI は世界中で使われているため、アクセスが集中している時間帯やメンテナンス中は回答が遅くなったり、エラーが頻発することがあります。
- 少し時間をおいてから再度アクセスすると正常に戻るケースが多いです。

- 代替サービスやツールの検討

- ChatGPT 以外にも類似の生成 AI が存在するため、どうしても使えない場合は別のサービスを試す方法も考えられます。
- ただし、校内ルールやセキュリティ上の制限がある場合は、ICT 担当や管理職に相談の上で導入を検討してください。

(2) 同じ質問なのに回答が違うのはなぜ？

- AI の動的生成の仕組み

AI は対話の履歴や前後の文脈を踏まえて、文章を“新たに生成”しています。**同じ質問**をしても、その時々**の内部状態や対話文脈の違いにより出力が変わる**ことは珍しくありません。

● 対話文脈を引き継がせるコツ

- 「前回の回答を踏まえて、もう少し具体的なアイデアをもらえますか？」といった形で、**過去のやり取りを参照**すると、連続した文脈を持った回答が返る可能性が高いです。
- 反対に、全く別の流れで聞きたい場合は、**対話をリセット**して新たに質問するのも手です。

(3) 不要に専門的・高度な回答が出る場合

- 「小学校低学年向けにやさしく」「専門用語は使わずに」などリクエスト

AI がやたら専門用語を並べたり、大学レベルの理論まで持ち出したりすることがあります。そんなときは、**プロンプトを再入力**し、「もっとやさしく解説してください」「5年生でも分かる例を加えて」と伝えてみましょう。

● レベルに合わない場合は修正を促す

- たとえば理科の実験補助として AI に説明文を書いてもらったら、中学生以上が読むような難解な文になってしまうケースがあります。
- そういう場合は「もう少し低学年寄りの言い回しに変えて」「1行につき1つの情報になるように」など具体的指示をすることで、**子どもたちの発達段階**に合った文章へ修正できます。

(4) 「なんとなくピンとこない」回答への対処

● ゴールが曖昧な場合

AI に「面白いアイデアを出して」と頼んだだけでは、何を面白いと感じるか分からず、**的外れな提案**が返ってくるかもしれません。

- ゴールを具体化することで、「自分は本当は何が欲しいのか」をはっきりさせると回答が洗練されやすくなります。

- 例：「休み時間のレクリエーションで、運動が苦手な子どもでも楽しめる簡単なゲームを2つ教えてほしい」など。

● 他のキーワードを試してみる

同じテーマでも、表現やキーワードを少し変えて質問すると、また違うアイデアが得られることがあります。

- 「行事」→「学校イベント」「学年行事」「保護者参加型」など、いくつかの言い換えで試行してみましょう。

(5) セキュリティ・プライバシー面の不安

● 個人情報や機密情報を入力していないか再確認

トラブルの多くは「**入力してはいけない情報**」をうっかり入力したことが原因になります。

- 対話が進むほどに「この子どものケースは…」と詳しく説明したくなる気持ちをグッとこらえ、**固有名詞や個人が特定される情報**は伏せてやり取りしましょう。

- 校内ガイドライン・自治体の規定を再度確認してください。

● 端末やアカウントの管理

- 自分のアカウントをうっかり他人に使わせていないか、パスワードは安全に保管されているか、定期的に見直しましょう。
- 教師が使用する PC やタブレットは、特に**端末のロックやネットワークの管理**を厳重に行い、児童が勝手にアクセスしないように配慮する必要があります。

〈次節へ〉

トラブルシューティングのポイントをまとめました。AI の利用環境や回答の特性上、「**想定外の挙動が起きる可能性を前提に、余裕をもって対処する**」ことが大切です。次の節(2-6「**小さな成功体験から始めよう**」)では、実践を重ねるうえで、まずどのように「**小さな成功**」をつくり、それを次のステップにつなげるかについて解説します。

(コラム) 「モヤモヤ」を AI に相談してみる

「回答を読んでみて、どこが問題というわけでもないんですが、なんとなくしっくりきません。この『○○(AI の回答)』という表現がどうも引っかかる気がするんです。なぜか考えられる理由をいくつか挙げてもらえますか？」

こう聞いてみると、AI が「対象年齢に合わない表現かもしれない」「前後の文脈とのつながりが不足している」など、**引っかかる原因となり得るポイント**を提案してくれることがあります。

もちろん AI の分析が的確とは限りませんが、**モヤモヤの正体を言葉にするヒント**になることも。違和感をうまく言語化できない時は、こうしたやり方を試してみるのも一手です。

2-6. 小さな成功体験から始めよう

AI 活用の基本的な操作や注意点、活用のコツは理解したつもりでも、いざ職員室で「よし、やってみよう！」と踏み出すのは勇気が要るかもしれません。ここでは、「まずは身近なところから気軽に始めてみる」ためのステップを提案します。

(1) 日常業務のちょっとした場面に取り入れる

● 学級通信やおたより文に一文だけ AI の文章を活かす

- たとえば「行事の告知」「季節のあいさつ」「子どもたちへの励まし」など、**差し込みやすい一文**を AI に提案してもらい、そこに自分なりのアレンジを加えてみましょう。
- 全体を丸ごと作ってもらうよりも、「**一部分だけ AI に任せる**」ほうが気軽に試せます。

● プチアイデアを授業に取り入れる

- 算数の導入で使う**ミニ問題**や、生活科の観察ワークに付け加える**一工夫**を AI に聞いてみる。
- 「こんな風にすれば子どもたちの食いつきが良くなるかも」という案を 1 つでも試せば、自分の実践力向上にもつながります。

(2) 上手くいったら振り返りをシェア

● 同僚との情報共有

- 「AI にこんな表現を作ってもらったら、学級通信が時短になった」「意外と子どもの反応が良かった」という**成功事例**があれば、ぜひ周りの先生にも紹介しましょう。
- 失敗談や「思ったほど子どもには響かなかった…」という微かなケースも含めて、**職員室や学年会議で共有**することで、校内全体が少しずつ AI 活用に慣れていきます。

● ICT 担当・情報主任と連携

- 校内に ICT の活用をサポートしている先生がいれば、その方と定期的にやり取りしておくで安心。
- 「こんな場面で使うにはどんなツールがいい?」「セキュリティ面は問題ない?」など、専門的な相談相手がいると、トラブル回避や応用の幅が広がります。

(3) 成功体験を次のステップへ

● 少しずつ活用範囲を広げてみる

- 学級通信の一文がうまくいったら、次は**保護者会資料**や**学年便り**など、もう少しボリュームのある文書作成に活用してみる。
- 授業アイデアを AI と一緒に考えてみたら、今度は**カリキュラムデザイン**や**単元計画**の段階でも相談してみる、といった具合に段階を踏むと無理なく始められます。

● 校内研修や勉強会への発展

- 数名の先生が試行錯誤して「これは便利!」と感じたら、学年や教科、ICT 担当の先生と協力して**校内研修**を開くのも一案です。
- 他の先生方の事例と組み合わせれば、**より多様な活用アイデア**が集まります。

(4) AI は「助っ人」—根幹は教師の専門性

たとえ AI が便利でも、「教師の専門性」がなくなるわけでは決してありません。

- 教師が「何を求めているか」を適切に AI に伝え、
- 提案を吟味して自分のクラスに合うようにアレンジし、
- 最後は教師の判断で子どもたちに提供する

このプロセスこそが、「教育者としての力量」と「テクノロジー活用能力」を掛け合わせる要です。AI はあくまで強力なサポーターであり、主役は常に子どもの学びと成長を見守る教師自身だということを忘れずにいたいですね。

〈次章へ〉

第 2 章では、AI に話しかけ始めるための基本から、具体的な質問のコツ、段階的な対話の深め方、トラブルシューティング、そして小さな成功体験の積み重ねによる活用促進までを解説しました。

ここまで読んで、「なるほど、少しやってみようかな…」と思えた方は、ぜひ日常業務や授業で試してみてください。

次の**第3章**では、いよいよ**教科指導での具体的な活用例**を扱います。国語・算数・理科・社会など、小学校でよくある場面で、どのようにAIを活かすと効果的かを具体的に見ていきましょう。

第3章：教科指導での活用

～小学校の授業づくりのパートナーとして～

3-1. 国語科での活用

国語科は、文章読解や表現活動を通じて「言葉の力」を育む教科です。授業づくりの中でAIを活用すると、**発問の工夫や教材研究、作文・感想文指導**などで新しい視点やアイデアを得られる可能性があります。ただし、**教科書の文章や著作権のある作品**を丸ごと入力するのはNGですので、そこは十分に注意しましょう。

3-1-(1) 読解指導：物語文・説明文の導入と発問づくり

■ 物語文を深める「問い」を作る

- **AIから発問例を提案してもらう**

例：「小学4年生向けの物語文を読む際、子どもたちの想像力を広げる発問を5つ考えて」

AIは「登場人物の気持ちを想像させる問い」や「物語世界と自分の経験をつなげる問い」などを提案してくれます。

- 得られた発問例を**自分のクラスの実態**（興味関心、読解力、授業時間など）に合わせて修正し、組み合わせると効果的です。

■ 説明文・論説文のポイント整理

- **導入やまとめで使える「要点簡条書き」**

例：「小学5年生向けの説明文で、筆者の主張をまとめる際に、子どもが理解しやすい要点を4つ挙げて」

AIが提示する要点を参考に、教師が最終調整したうえで板書計画やワークシートに反映させると、子どもにも分かりやすい構成が作りやすくなります。

- **注意点：著作権**

教科書の本文をそっくり入力するのは避け、作品名や要約の形で相談しましょう。「○○という物語文で、主人公の成長を理解するための導入発問を考えたい」という程度ならOKです。

3-1-(2) 作文・感想文指導のアイデア

■ 「書き出しが苦手」な子へのアプローチ

- AIに「小学生が書く読書感想文の書き出し例を3パターン」などと聞いてみると、いくつかの書き出しモデルが返ってきます。
- これを「あくまで**参考例**」として子どもたちに見せることで、「最初の一文をどう書くか」のハードルを下げるヒントに。

■ 発展的な指導：構成や表現を考える

- 「起承転結」をわかりやすく説明する例や、段落ごとのポイントをまとめた**小見出し**をAIに提案してもらい、それを自分なりに組み合わせると**指導案の作成**がスムーズに。

- 児童の作文を添削する際に「よくある誤り」「表現を豊かにするコツ」をAIに挙げさせ、教師がポイント整理に活用する方法も考えられます（ただし、実際の児童の文章を入力するのは個人情報保護の観点から避ける）。

3-1-(3) 漢字や言葉の学習支援

■ 漢字指導を楽しくする工夫

- 「3年生で習う漢字を使った簡単なゲームのアイデアを3つ提案して」とAIに聞けば、フラッシュカードや仲間探しゲームなど、複数のバリエーションを示してもらえます。
- それを参考に、自分のクラスでやりやすい形に**再構成**すると、学習活動の幅が広がるかもしれません。

■ 語彙指導での活用

- 「“うれしい”の類義語をいくつ挙げられるか」「“夏”をイメージさせる言葉を数十個」など、**単語リスト**を得るためにAIを活用することも可能。
- こうしたリストをもとに「似た意味だけど微妙に違う」ニュアンスをクラスで考えるアクティビティを行えば、**語感や表現力の磨き**につながります。

3-1-(4) 実践例・コラム（架空の事例）

■ 事例1：発問づくりが楽になった

ある先生は、物語文の導入をどう作ろうか迷ったとき、AIに「登場人物の心情を想像させる発問を5つください」と依頼。すると、「主人公がこのときどう感じたと思う？自分ならどうする？」といった問いのほか、背景描写との関連を問うアイデアも得られました。

> 「自分ひとりで考えていたら浮かばなかった切り口をもらえたので、子どもたちの反応も新鮮でした」

■ 事例2：作文テーマの相談

教師がAIに「小学校6年生向けの卒業文集のテーマとして、子どもたちが興味を持てるアイデアを提案して」と尋ねたところ、家族や友達、将来の夢を絡めた複数テーマが得られたそうです。

> 「その中から学級らしいテーマを選び、結果的に子どもたちの作文意欲が高まりました。最後は『自分たちの小学校生活を振り返る思い出エッセイ』でまとめました」

■ 事例3：漢字練習ゲームをアレンジ

AI提案の「漢字カルタ」をもとに、担任が独自のルールを追加。例えば「間違えたら一回休み」や「正しい読みを言えたらもう1枚取れる」などアレンジし、クラス全体が盛り上がる活動になったそうです。

> 「AIの提案だけだと物足りない部分は自分で工夫しましたが、“材料”があるので考えやすかったですね」

〈次節へ〉

国語科では、文章読解や表現活動といった「**言葉にまつわる学習**」が中心になるため、**AIが生成した文章やアイデアを材料として活用**しやすい場面が多いと言えます。もちろん、**教師の最終判断**で著作権や内容の正確性をチェックしたうえで使うことが大切です。

次の節(3-2「算数科での活用」)では、**文章題や導入のアイデア**など、算数ならではの活用例をご紹介します。国語とは異なる角度から AI を活かすヒントを、ぜひ見つけてみてください。

3-2. 算数科での活用

算数科では、子どもが躓きやすい計算の導入や応用問題、文章題など、指導の工夫が必要な場面が多くあります。**AI を活用することで、問題文や導入アイデアのバリエーションを増やしたり、先回りしたつまづき対策**を講じたりしやすくなるでしょう。ただし、計算の正確性や段階的指導は、教師がしっかりとチェックする必要があります。

3-2-(1) 文章題の作成とバリエーションづくり

■ 低学年への導入

● 身近な題材を使った文章題

- 例：「くり上がりのある足し算の文章問題で、子どもが日常生活をイメージしやすいように『買い物』や『おやつのお菓子』を設定した問題文を作してほしい」
- AI が提示した問題例をもとに、表記ゆれや数字の難易度を教師が最終調整すると、ちょうど良い難しさの課題に仕上がる。

■ 中学年向け

● かけ算・わり算の応用問題

- 「小学3年生の子どもがワクワクしそうな買い物問題」「わり算の筆算を使う生活場面」を AI に複数考えさせ、教材研究の時間を短縮。
- いくつかの案を見比べて「面白そう」「簡単すぎるかも」といった判断を加え、最適な問題セットを作る。

■ 高学年向け

● 図形・割合など、多様なバリエーション

- 「分数×分数の文章問題を、スポーツやゲームのシーンに絡めて5題提案して」
- AI が返す問題文に難易度のバラつきがあれば、**習熟度別プリント**に仕分けして使うことも可能。

3-2-(2) 授業導入のアイデア・ゲーム化のヒント

■ 計算練習のウォーミングアップ

- 「朝の会や授業冒頭の5分間でできる計算ゲーム」を AI にリクエスト。
 - 例：カードを引いて即席で足し算や掛け算を競うゲーム、グループ対抗で答え合わせをするなど。
 - AI のアイデアをそのまま使うのではなく、クラスの人数や教室の広さを考慮してアレンジしよう。

■ 図形の性質を実感させる活動

- 「三角形の内角の和を調べる導入」や「平行四辺形の特徴をゲームで体感する活動」を AI に聞いてみる。
 - AI から得たアイデアをヒントに、実際には**紙テープや定規**を使ったり、子どもの身体を動かす活動に発展させると理解が深まりやすい。

3-2-(3) つまづきポイントの事前把握

■ “よくある間違い”をまとめてもらう

- 例：「小学校5年生の分数の足し算で、子どもが混同しがちな計算例と対策を教えて」
- AIが挙げる誤り例（たとえば分子同士、分母同士を足してしまうなど）を授業設計に取り入れ、**事前に注意喚起**できる。

■ 先回りした支援プラン

- 「子どもが計算手順を混乱しないように、カードや図を使ったステップ学習を考えて」と指示して、具体的なステップ案を得る。
- もちろん、実際に使うには**学級の理解度や教材環境**に合わせて微調整が必要。

3-2-(4) 実践例・コラム（架空の事例）

■ 事例1：買い物問題のバリエーション

「小学3年生のかけ算導入で、スーパーや文房具店を舞台にした文章題を3つ提案してもらった。1つは自分が想定していたものより複雑だったので、数字を小さくして使ったら丁度良い難易度に。子どもたちも『身近だ』と喜んで解いていました。」

■ 事例2：ゲーム化した図形学習

「教員がAIに『平行四辺形の理解を深める簡単なゲーム』を尋ねたら、“パズルピースに切った紙を組み合わせて形を作る競争”が挙げられました。さらに『ペアで1分以内に形を完成させる』といったタイム制を加えたら大いに盛り上がり、図形認識も進んだ印象です。」

■ 事例3：先回り支援で計算ミス減少

「分数のかけ算に苦手意識をもつ子が多いのを見越して、AIに『ありがちなミス例』を聞いてみた。指導案にそのミスを予防する活動を組み込んだら、実際の授業でミスの数が減り、子どもたちの理解がスムーズに進んだ。」

〈次節へ〉

算数科では、**文章題や導入活動、つまづき対策**など、さまざまな場面でAIを役立てることができます。子どもたちの理解度や興味を見ながら問題の難易度・内容を調整する必要がありますが、AIの提案はその「たたき台」として有効でしょう。

次の節(3-3「理科・生活科での活用」)では、**実験手順や観察活動の工夫**、生活科の身近な探究などをテーマに、AIがどのようにサポートできるかを紹介します。

3-3. 理科・生活科での活用

理科は**観察・実験**を通じて科学的な考え方を身につける教科であり、生活科は**身近な環境や身の回りの事象**を探究する学習が中心です。いずれも「教材研究や事前準備の手間」がかかりやすく、**安全面や発展学習**の工夫も必要です。AIを活用すれば、事前につまづきやすいポイントや**具体的な活動アイデア**を得やすくなり、授業設計をスムーズにする一助となるでしょう。

3-3-(1) 実験手順の確認と安全指導

■ 実験計画の下支え

- **AIに実験の流れをざっくり示してもらおう**

例：「小学4年生で扱う“水の3つの状態変化”実験の手順例を作ってください。安全面で注意すべきことも挙げてほしい。」

AIは、「やかんで水を沸騰させる際の注意」「温度計の扱い」「やけど予防」などの要点を提案してあげることがあります。

- **指導案の骨組みとして活用**

提案された手順をそのまま使うのではなく、**学校の設備やクラスの人数**に合わせて修正するのがポイント。実際の道具の有無や子どもたちの理解度に応じて、時間配分などを最終調整しましょう。

■ 安全指導のチェックリスト

- 例：「5年生の電気回路の実験で注意すべきポイントは？」と尋ねると、**火傷・感電防止**や**導線の扱い**などが挙がる場合があります。
- AIの回答が不十分なときは、「他に注意すべき安全面をもっと具体的に挙げてほしい」と追質問をすると、さらに詳しいチェックポイントが得られます。

3-3-(2) 観察ワークシートや探究活動の設計

■ 観察視点を整理する

- 「1年生のアサガオの観察で、子どもたちが着目すると良いポイントを教えてほしい」とAIに依頼。
 - 「芽が出るタイミング」「葉の形や色」「つぼみの状態の変化」など、**複数の観察観点**が得られます。
 - 得られた情報をもとにワークシートを作り、**定期的な記録活動**を促すといった指導案を立てやすくなる。

■ 生活科の身近な探究

- 「地域の公園で秋を感じる活動をしたい」と伝えると、落ち葉や木の実の収集、気温の変化記録など、**具体的な探究テーマ**を提案してあげることがあります。
- そこから教師が**子どもたちの実態**（通学路や地域の特徴）に合わせ、最終案を作りましょう。

3-3-(3) 実践コラム：成功・失敗談（架空の事例）

■ 事例1：実験時間の短縮に成功

「6年生で『ものが燃えるときの空気の変化』について実験するのに、どの段階で注意するか・気をつけるポイントをAIに列挙させました。**ガスバーナー使用の注意**や**換気のタイミング**がまとまっていたので、指導案が作りやすく、実際の授業時間を短縮できました。」

■ 事例 2：不十分なところは追質問で補足

「生活科で“春の草花”を探す活動を AI に聞いたところ、書かれていた花が実際には校庭に咲いておらず、地域によっては見られないものが混ざっていました。そこで『もっと一般的な植物だけに絞って』と再指示したら、地域的に馴染みのある植物名が挙がり、**現場に合ったワークシート**を作れました。」

■ 事例 3：観察視点の幅が広がった

「低学年が育てているミニトマト観察で、私が思いつかなかった“匂い”や“葉の質感”の観点まで AI が提案してくれたので、子どもたちにも『たしかに匂いが変わる!』と発見が広がりました。」

〈次節へ〉

理科や生活科では、**実験手順の安全確認**や**観察活動のポイント洗い出し**など、AI に“リスト化”や“構造化”を任せると、教師が見落としがちな部分を補完しやすくなります。ただし、**校内ルール**や**実際の環境**（教室の広さ、用具の数など）とのすり合わせが必須です。

次の節(3-4「社会科での活用」)では、地図・資料・統計などを扱う社会科の授業づくりで、どのように AI を活かすことができるかをご紹介します。

3-4. 社会科での活用

社会科では、**地図・年表・統計資料**など、多様な情報源を読み取り、それらをもとに考察する力を育成します。小学生にとって、数字やデータの読み取りは難しさを伴うこともありますが、AI を活用して授業アイデアや発問例を得ることで、**児童が主体的に学べる仕掛け**を考えやすくなるでしょう。ただし、**教科書や公的資料で確認する正確性**は常に意識しておく必要があります。

3-4-(1) 資料の読み取り支援

■ 統計データやグラフの要点整理

- たとえば「小学 5 年生向けに、人口ピラミッドの見方を簡単に説明すると？」と AI に尋ねると、専門用語をかみ砕いた解説や、生徒への問いかけ例を得られる場合があります。
- 「もう少し低学年でも理解できるように」などの追加指示で、文体や難易度を調整すると効果的です。

■ 年表や地図の導入

- 「鎌倉時代の特徴を小学生に伝えるときのポイント」をまとめてもらう、地域の地形を簡単に説明してもらうなど、**導入の“たたき台”**として活用。
- 年表や地図そのものをそっくり入力するのは望ましくありませんが、「こういう地形を説明したい」「この時代の重要キーワードを整理したい」といった形なら、AI が概略を提示してくれます。

3-4-(2) 発問づくり：身近な問題意識を刺激

■ 地域学習・校区探検の例

- 「校区探検で子どもたちが気づきを得られる問いかけを 3 つ提案してほしい」と依頼すると、
 1. 「道路の幅や交通量はどれくらい？」

2. 「公園はどのように使われている？」

3. 「古い建物や神社が地域の歴史を物語っていないか？」

といった視点が得られるかもしれません。

- 教師はこの中から自分のクラスに合った発問を選び、**実際のフィールドワーク**と組み合わせて授業を展開するとよいでしょう。

■ SDGs や身近な環境問題との関連

- 「小学校4年生が、身近な環境問題を考えるきっかけになる発問を作って」とAIに尋ねると、ゴミ分別や食品ロス、地球温暖化などの視点が列挙される場合があります。
- 得られたキーワードを使い、子どもたちが自分事として考えられるようなローカルな事例（学校や地域での取り組み）を組み合わせると、学習が深まります。

3-4-(3) 主体的・対話的な学びのサポート

■ 討論・ディベートのテーマづくり

- 「高学年向けに、暮らしと産業を考える討論会のテーマをいくつか提案してほしい」
 - 例：地域の農産物をもっと活用するにはどうすればいいか？ 商店街を活性化させるアイデアは？ など
- AIが出したテーマに加え、自分の学校や地域の実情を合わせて調整し、**児童が意欲を持って取り組めるテーマ**を組み立てましょう。

■ 「問いの連鎖」をつくる

- 社会科では、「なぜこうなったのだろう？」という**問いを連鎖的に深める**学習が重要です。
- AIに「さらに掘り下げるための質問を提案して」と依頼し、教師自身が見落としていた視点を拾うことで、授業に**多角的な切り口**を追加できます。

3-4-(4) 実践例・コラム（架空の事例）

■ 事例1：人口ピラミッドの導入で興味を引く

「小学5年生で人口問題の学習をする際、AIに『子どもが身近に感じる発問』を5つ依頼。『もし、学校の各学年の人数が全然違ったら？』という問いが面白かったので、実際にクラスで話し合わせると、少子高齢化ともつながる話題に発展し、子どもの興味が広がりました。」

■ 事例2：校区探検と連動した発見活動

「生活科と社会科の合同で、地域探検を行う際の質問例をAIにいろいろ挙げてもらった。『道が狭い場所はある？そこに住む人はどう感じている？』という視点が特に斬新で、実地見学で『車が通りにくいね』と子どもたちが気づきを共有。より深い学びに結びつきました。」

■ 事例 3：SDGs の関連性に気づく

「5年生で環境をテーマにした授業。AIからは『学校の給食で残っている食材はない？』『水道の使い方で工夫できることは？』などの具体的な質問をもらい、児童が『自分たちにできること』を考えるきっかけに。単なる“世界の問題”でなく身近な行動につながられました。」

〈次節へ〉

社会科でのAI活用は、**資料読解の要点整理**や**発問づくり**、**地域学習**や**SDGsとの関連**など、子どもの思考を深めるプロセスを支援する形で有効に働きます。最終的な指導案に落とし込む際は、**必ず教科書や公的資料と照合**し、正確性を担保しましょう。

次の節(3-5「音楽・図工・家庭科などの活用ヒント」)では、さらに教科の幅を広げて、「表現活動」や「生活に根ざした学習」をサポートするAI活用アイデアを紹介します。

3-5. 音楽・図工・家庭科などの活用ヒント

国語や算数、理科・社会と並行して、音楽・図工・家庭科といった“表現活動”や“生活活動”系の教科でも、AIはアイデア提供や作業効率化の役に立つ可能性があります。いずれの教科でも、**教師が持つ専門性とAIの発想力を組み合わせることで、新鮮な指導案を生み出すことができるでしょう。**

3-5-(1) 音楽：楽しい授業アイデアや鑑賞の視点

● 行事や発表会での曲選び・進行プログラム作成

- 例：「3年生の学習発表会で合奏する曲を何にしようか迷っている。子どもにも演奏しやすく、保護者が楽しめる曲を提案してほしい」とAIに頼むと、曲目リストや簡単なアレンジ方法を示してくれることがあります。
- 楽曲そのものに著作権がある場合は、**その曲の歌詞や楽譜をまるごと入力しないよう注意**しつつ、参考程度のリストアップに留めるのが安全です。

● 鑑賞の視点づくり

- 「小学校高学年向けに、クラシック音楽を鑑賞するときのポイントを3つ挙げて」とAIに尋ねると、**曲の背景・作曲者の意図・楽器編成**など、多角的に捉えるヒントが返ってくるかもしれません。
- 鑑賞カードのフォーマットや、児童への問いかけ例（「どんな場面を想像した？」など）を補完してくれるので、授業準備がはかどります。

3-5-(2) 図工：作品制作のテーマ・技法アレンジ

● 「材料選び」に関するアイデア

- 例：「小学3年生が取り組める廃材工作で、準備が容易で安全に作れる作品アイデアを教えて」とAIに頼むと、ペットボトルや段ボールを用いた簡単な制作案が複数出てくる可能性があります。
- それをヒントに、クラスの子どもたちが興味を持ちそうなテーマを絞り込んだり、安全管理や準備物リストを**追加質問**で明確にすることも可能です。

● 絵画指導や鑑賞活動

- 「4年生の子どもが描く“夢の街”をテーマにした絵画作品で、構図や色彩面で注意すべきポイントを挙げ」とAIに尋ねると、遠近感や色の重なり、物語性をもたせるなどの案が返ってくるかもしれません。
- 鑑賞学習でも「子どもたちが絵を観るときに意識すると良い点」をリスト化してもらい、教室掲示のヒントにすることができます。

3-5-(3) 家庭科：生活に密着した題材と連携

● 調理実習の工程確認

- 「5年生で行う調理実習（ご飯と味噌汁）について、手順と安全面を整理してほしい」と依頼すれば、基本的な手順をまとめたリストが得られるはずです。
- ただし、具材や道具の扱いは学校・自治体によってルールがあるため、**AIの提案を鵜呑みにせず、必ず最終的に自分で修正**してください。

● 裁縫や生活技能のステップ学習

- 「ボタン付けの練習を段階的に教えるときのアプローチを考えて」とAIに聞けば、**簡単な縫い方→本番でのボタン付け**という流れや注意点などをリスト化してくれるかもしれません。
- 小学校低学年向けか、高学年向けかで難易度が変わるので、「〇年生向けに」と明示してやり取りを進めると良い結果が出やすいでしょう。

3-5-(4) 事例コラム：試してみた先生の声（架空の事例）

■ 事例1：音楽会の曲リスト整理

「運動会とは違う雰囲気を出したくて、AIに『5年生が演奏できる合奏曲の候補を複数出して』と依頼。定番曲のほか、あまり知られていない曲も提案されたので、試聴してみたら意外と子ども受けが良く、発表会が新鮮な感じになりました。」

■ 事例2：図工での夏休み工作企画

「夏休み前に、家庭学習の工作アイデアを紹介するプリントを作成。AIに『保護者が準備しやすい材料』を条件にして5~6種類のアイデアを出してもらい、子どもたちに選ばせる形にしたら好評でした。手間なく複数の選択肢を提示できて助かりました。」

■ 事例3：家庭科の裁縫ステップ

「縫い方を覚えられずに苦手意識を持つ子が多く、AIに『子どもが段階的に練習できる取り組み』をリスト化してもらいました。つまづきポイントを先取りして対策し、授業がスムーズに進行。結果、子どもたちの“できた！”を増やすことができました。」

〈次節へ〉

音楽や図工、家庭科でも、**表現活動や生活に密着した学習**を AI がサポートできる場面は多岐にわたります。いずれも教師が子どもたちの特性を理解し、**安全面や学習環境**に合わせて最終調整するのが前提ですが、AI を「アイデアの引き出し」として使うメリットは大きいでしょう。

次の節(3-6「**総合的な学習の時間（探究学習）**」)では、各教科にとどまらず、**教科横断的に考える総合的な学習や探究活動**で、AI をどう活用できるかをご紹介します。

3-6. 総合的な学習の時間（探究学習）

小学校の「総合的な学習の時間」では、**子どもが主体的にテーマを選び、情報を収集し、考えを深めていく**ことが重視されます。テーマが幅広く、調べ学習やインタビュー活動なども伴うため、指導案の作成やファシリテーションには多くの手間がかかりがちです。**AI を活用**すれば、事前の情報整理や発問づくり、活動の進行管理など、さまざまな支援が期待できます。

3-6-(1) テーマ設定と学習計画の相談

- 児童が興味を持てるテーマを探る
 - 「総合的な学習で、地域や環境、福祉など広い範囲から子どもが関心を持ちそうなテーマをいくつか挙げてほしい」と AI に依頼。
 - 得られたテーマ案をきっかけに、**学年や子どもの状況**に合った探究課題を選定しやすくなります。
- 学習計画の下支え
 - 「〇年生でテーマ××の探究をする場合、どんなスケジュールや学習ステップが考えられますか？」
 - AI から返ってきた目安（調べ学習→インタビュー→まとめ発表など）を**自校のカリキュラム**に合わせて組み替えれば、計画作成に要する時間を短縮できるでしょう。

3-6-(2) グループワークでの発問や進行管理

- 子ども同士の話し合いを活性化する問い
 - 「3～4人のグループで、テーマについて意見交換するとき、どんな問いかけをすれば話が深まりそうか？」と AI に尋ねる。
 - 例：メリット・デメリットを整理する、別の立場から考える、似た事例と比較するとどうか…など、多角的な発問が提案される場合があります。
 - その中から担任がピックアップし、**学級状況に合わせて焦点化**すると、有意義な話し合いを導きやすいです。
- 進捗管理や役割分担のアイデア
 - 総合的な学習では、**長期にわたる探究活動**になることも珍しくありません。
 - AI に「子どもの進捗管理を円滑にするためのシート例」や「プロジェクト内での役割分担方法」を尋ね、**たたき台**として参考に見ましましょう。

3-6-(3) 情報活用能力の育成

● 子どもが AI を使うときのルールづくり

- 探究活動で子どもが調べ学習に AI を利用する場合、**個人情報**の取り扱いや**誤情報のチェック**など、注意すべきルールがあります。
- 「小学生が AI を使用するときには押さえておくべき約束事を挙げて」と AI に尋ね、教師がさらに校内規定や学年実態を踏まえて整理すると、**わかりやすい利用ガイド**を作りやすくなります。

● 複数情報源との照合を促す

- AI で得られた回答だけを信じ込まず、**図書室やウェブサイト、地域へのインタビュー**など、他の情報源とも突き合わせる必要性を子どもに伝えることが大切です。
- AI の提案を参考に、「まだ足りない情報は何だろう？」と問い直すことで、**調べ学習へのモチベーション**を高める方法も考えられます。

3-6-(4) 事例コラム：どんなふうに活用した？（架空の事例）

■ 事例 1：地域の河川調査

「5年生で近くの川をテーマに探究学習をする際、AI に『どんな切り口で調べるといいか』を 10 個挙げてもらいました。水質や生物調査、歴史的背景、災害との関係など、多角的な視点が並び、子どもたちはそれぞれ興味を持った視点を選択。探究テーマの広がりにも役立ちました。」

■ 事例 2：話し合いを深める発問

「グループディスカッションが表面的になりがちだったので、AI に『子ども同士の意見を引き出す追問い』を提案してもらいました。『もし自分がその状況に立ったら？』『他の地域や国ではどうしている？』など多面的な問いかけが出てきて、実際の話し合いが活性化しました。」

■ 事例 3：情報リテラシー教育

「児童が調べ学習に AI を使いたいというので、教師が『小学生向けの AI 利用ガイドラインを作ってほしい』と AI に依頼。返ってきたリストを校内ルールに合わせて補足し、児童用の“AI 利用の心得”を作成。子どもたちには『AI を鵜呑みにしない』『必ず他の資料と比べる』などの基本姿勢を教えました。」

〈次節へ〉

総合的な学習の時間（探究学習）では、**テーマ選びから活動計画、情報リテラシー教育**に至るまで、多角的に AI を活用するチャンスがあります。一方で、子どもが AI を直接使う場合は**校内ガイドライン**や**個人情報保護**の観点を十分に考慮しながら段階的に指導する必要があります。

次の節(3-7「**まとめ：教科を超えた学びへ**」)では、これまで扱ってきた各教科の活用例を総合し、**教科横断的・学校全体での展開**を視野に入れたアイデアをご紹介します。

3-7. まとめ：教科を超えた学びへ

第3章では、国語・算数・理科・社会、そして音楽・図工・家庭科など、**多様な教科でのAI活用例**を見てきました。さらに総合的な学習（探究学習）では、教科の枠を超えた幅広いテーマに取り組むため、AIのサポートが一層効果的に働く可能性があります。ここでは、**教科を横断した学び**や、学校全体でAIを使いこなすためのヒントを整理しておきましょう。

3-7-(1) 教科横断的なアイデア

● 数学×技術×美術：図形アート制作

- たとえば高学年の算数（図形単元）と図工を組み合わせ、「コンピュータで図形アートを作り、色彩表現を工夫して作品に仕上げる」というプロジェクトが考えられます。
- AIに「幾何学模様を描く簡単なプログラミング例」を尋ねたり、「抽象的なアート作品の鑑賞ポイント」を聞いたりして、**複数教科を超えた視点**を手軽に得ることが可能です。

● 国語×総合的な学習：地域の歴史紹介

- 「地元の史跡を案内するパンフレットを作ろう」という学習で、AIに**わかりやすい紹介文**や**疑問を引き出す質問**を提案してもらい、子どもたちが文章をリライトして仕上げる、という流れも実践できるかもしれません。
- 国語科で学んだ読み書きの力を、社会や総合の視点と結びつける好例となるでしょう。

3-7-(2) 教科指導×生徒指導：連動の視点

● 学級全体の課題解決に生かす

- 学習面だけでなく、**学級経営や生徒指導**のヒントをAIに尋ねることで、指導と生活指導が連動した授業づくりを目指せます。
- 例：生活科や総合的な学習で「クラスのルールを考える活動」を行い、AIから他校の事例や年齢相応のルール例を参考にして、子どもたちとより深い話し合いをする。

● 保護者や地域と連携する授業づくり

- イベントや公開授業での案内文をAIに整形してもらい、保護者への情報発信を効率化。
- その分、教師が「地域ボランティアとの連携」など、本来注力したい部分に力を注ぎやすくなります。

3-7-(3) 次章へのつながり

本章では、各教科の事例を中心に、AIを**授業づくりのパートナー**として活用するアイデアを多数紹介しました。いずれの例でも、**AIが示す案はあくまで“たたき台”**であり、子どもたちの実態に合わせてアレンジ・調整するのは教師の役割です。そのプロセスを経ることで、**教師の専門性**がより引き立ち、子どもたちに深い学びを提供できるでしょう。

次の**第4章**では、**学級経営や児童指導**など、**授業以外の場面**でAIがどのように役立つかを詳しく見ていきます。保護者対応や学級通信づくり、生徒とのコミュニケーションなど、多岐にわたる活用シーンをぜひ参考にしてみてください。

〈第3章まとめ〉

- **各教科で得られる AI のメリット**
 - 国語：文章例・発問のアイデア／算数：文章題作成・ゲーム化のヒント／理科・社会：実験・調査学習の視点整理／音楽・図工・家庭科：作品づくりや活動アイデア
- **教科を横断してシナジーを生む**
 - 総合的な学習での探究活動や、異なる教科を掛け合わせたプロジェクトで AI を活用すると、より豊かな指導案が得られる可能性大。
- **教師の専門性と最終判断が鍵**
 - AI の回答をそのまま使うのではなく、子どもたちの状況に合うよう指導案を仕上げるのは教師の重要な役目。

このように、AI は「授業づくりのパートナー」として無限の可能性を秘めています。ぜひ「安全面への配慮」と「教師の知見」を掛け合わせ、子どもたちの学びをさらに豊かにする手段として活用していきましょう。

第4章：児童指導・学級経営での活用

～寄り添う指導のヒントとして～

4-1. 児童との対話：多様な視点との出会い

学級担任や生徒指導に携わる教師は、日々さまざまな児童の悩みや課題に向き合います。たとえば、**登校しぶりや学習意欲の低下**といった不安、**友だち関係のトラブル**、あるいは**部活動や校外活動**での悩み相談など。こうした場面では、**一人ひとりに合った対応策**を見つけるのは容易ではありません。

しかし、AIを活用して**一般的・抽象的なケース**で相談すれば、**複数の視点から対応アイデア**を得ることができます。あくまで参考意見として活用しつつ、最終的な対応方針は教師が責任をもって判断する——それが安全かつ効果的な使い方です。

4-1-(1) 登校しぶりや学習意欲低下への声かけ

■ 「たとえ話」「段階的接し方」のアイデアを得る

- たとえば、AIに「小学4年生の児童が、朝になると不安で学校に来られないケース。どんな声かけの選択肢があるか？」と尋ねると、
 1. 「まずは安心感を伝える短い言葉」
 2. 「本人が興味をもつ話題で会話を始める方法」
 3. 「保護者連携やスクールカウンセラーとの協力体制」
などの大枠が提案されることがあります。
- その中で、教師が「この子にはこのアプローチが合いそう」と選んで実践し、微調整していく流れがスムーズでしょう。

■ 具体的事情は伏せる

- 児童の実名や具体的な家庭状況などを入力すると**個人情報保護**の観点でNGです。
- 「4年生男子、学習意欲が落ちている、何に原因があるかははっきりしない」程度に留め、「どんな声かけプランが考えられるか？」と相談します。

4-1-(2) 友だち関係やトラブルへの対応

■ 一般的な事例研究としてAIを活用

- 「休み時間に特定の児童だけが仲間外れにされがち」というケースを、**固有名詞を伏せたまま** AIに相談すると、
 - まず教師が状況を観察・把握するためのチェック項目
 - 当該児童に対する声かけ例

- 学級全体で取り組む具体的活動（ロールプレイ、話し合いなど）
といった選択肢が提示されるかもしれません。

- もちろん、それが現場にそのまま当てはまるとは限りませんが、**教師の気づきや打ち手の幅を広げる上で**有用です。

■ 判断に困ったら専門機関や管理職と連携

- AI の提案はあくまで**一般的・理想的**な対応策に留まるため、いじめ防止や緊急のトラブルに関しては、**管理職やスクールカウンセラー、教育委員会**と連携して方針を固めるのが基本。
- AI を用いてケーススタディを充実させつつも、**実際の判断はチームで行う**体制が大切です。

4-1-(3) 部活動や校外活動の悩み事例

■ 部活動での不登校ぎみ児童へのアプローチ

- 例：「野球部の練習に来なくなった高学年の子がいる。練習がきついと言っているが、どうフォローできるか？」
- AI は「いきなり責めず、まずは児童の気持ちを聞く」「練習メニューを段階的に調整する」「保護者と連携して、何が苦しいのか確認する」などを提案することがあります。
- 参考にしつつ、**部活顧問や学年主任**と実情を照らし合わせ、具体的アクションへ落とし込むとよいでしょう。

■ 校外活動・遠足などでのサポート

- 遠足や校外学習時に、不安を抱える児童へのケア方法や、事前・事後の指導案を AI に相談。
- 「事前にバディ制度を設ける」「保護者ボランティアを募る」「見通しを子どもに示す」などの選択肢が出たら、**学校のルールに合わせて採用可否を判断**します。

■ ポイント：個人情報をもった「一般化」が鍵

本節の事例を通じて、AI に児童指導やトラブル対応を相談する際は、**個人情報を一切出さず、状況を抽象化**して聞くのが前提だと分かります。

- **NG 例**：「4 年 1 組の〇〇さんが、授業中に泣いて暴れ出すことが増えて…」

- **OK 例**：「小学 4 年生の男子児童が、授業中に落ち着かず大声を出すケース。どんな声かけや環境調整が考えられるか？」

AI が提示するのは“あくまで**一般的な選択肢**”であり、そこから実際のクラス・学校に合った対応を**教師が取捨選択**することが大切です。

〈次節へ〉

登校しぶり、学習意欲低下、友だちとのトラブル、部活動の悩み……こうした「児童指導」の場面で、AI は**多角的なアイデア**を提供してくれる頼もしい存在になり得ます。一方で、**個人情報保護**を最優先し、最終判断はあくまで教師が担う姿勢が重要です。

次の節(4-2「保護者との連携：信頼関係を築く」)では、保護者会や個人面談、学級通信などを通じて保護者と連携するときに、AIがどのように支援できるかを取り上げます。

4-2. 保護者との連携：信頼関係を築く

学校と家庭の連携がスムーズに進むほど、児童の学びや成長はより豊かなものになります。保護者会や個人面談、日常的な連絡で、**わかりやすい情報提供**や**親しみやすい文書**を心がけることは大切ですが、忙しい中での文面作成や準備は負担になりがちです。AIを活用すれば、**短時間で複数の言い回しや構成案**を得られ、**信頼関係の構築**により集中できる可能性があります。

4-2-(1) 保護者会・個人面談の準備

■ 面談の進め方や想定質問の整理

- **大枠の段取りをAIに作らせる**

「6年生の進路面談で、よく出る質問や保護者の不安に関する想定問答を作ってもらおう」など。

- 例：中学校進学に向けた情報（部活動、学習面、校則など）
- 例：家庭学習のアドバイス

- AIが提案する項目をもとに、**自クラスの現状**（学習状況や保護者層の傾向）に合わせて精査し、実際の面談資料を作成。

■ 個人面談の「予想質問リスト」

- 新学期や学期末の個人面談では、保護者からの質問が多岐にわたるかもしれません。
- AIに「学年××の個人面談で保護者が気にしそうなポイントを箇条書きで出してほしい」と頼むと、進学・行事・成績・生活習慣など、**多角的な項目**を挙げてくれることがあります。
- 一覧化することで教師自身が**心構え**を持ちやすくなり、面談の流れがスムーズになるでしょう。

4-2-(2) 保護者通信・学級便りの作成

■ 文案の下書きをAIに依頼

- 「春の保護者会のお知らせ文」「PTA活動のお願い文」など、定型的な文書作成をAIに下書きさせる事例。
 - 例：「4月の学級懇談会開催のお知らせです。日時は○月○日（○）16:00～17:00。挨拶と学級経営方針、行事予定の説明を行います…」
- AIの文章をたたき台として、**学校独自のルールや校長の方針**などを加味し、教師が修正・校正して仕上げます。

■ 「優しい語調で」「親しみやすい文体」に変更

- AIに「もう少しソフトなトーンで書き直してください」などと指示すると、文面が親近感のある表現に変わることがあります。
- 保護者との距離を縮めたい場合や、堅苦しい文章を避けたい場面に応用できます。

4-2-(3) トラブル発生時の連携や説明文書

■ 緊急連絡・お詫び文の書き方

- 何か問題が起きたとき、保護者に向けて**短時間でわかりやすいお知らせ**を作りたい場合があります。
- AIに「トラブル発生時の連絡文」や「お詫び文例」を相談し、要点を整理してもらうと、教師は**詳細や事情に即した修正**に集中でき、素早く適切な文章を準備可能です。

■ ただし学校全体のガイドラインを順守

- 保護者への公式文書には、**学校独自の規定や教育委員会の方針**がある場合が多いです。
- AIが提示した文章をそのまま流用するのではなく、必ず上長（管理職）の確認を取り、**校内承認フロー**に沿って発信します。

■ ポイント：教師の最終チェックが不可欠

保護者とのコミュニケーション文書や面談資料は、**学校と家庭をつなぐ大切なかけ橋**です。AIが作った文章であっても、

1. **事実誤認がないか**（日時や場所のミスなど）
2. **保護者に寄り添った表現か**（一方的すぎないか、敬意・配慮があるか）
3. **個人情報や機密情報が漏れていないか**

を教師がしっかり最終確認し、修正することで、**安心感と信頼**を保てます。

〈次節へ〉

保護者との連携では、文書作成や面談準備などにAIを活用することで、**時間を節約しながら内容をより充実させる**余地があります。次の節(4-3「学級通信：心をつなぐメッセージ」)では、学級通信をはじめとした**子どもと保護者を結ぶ情報発信**の場面で、AIがどのように使えるか詳しく見ていきます。

4-3. 学級通信：心をつなぐメッセージ

学級通信や学級だよりは、**児童と保護者を結ぶ大切なツール**です。授業内容や児童の頑張り、行事予定などを定期的に伝えることで、保護者との信頼関係を深めると同時に、子どもの学習意欲を高める効果もあります。一方で、忙しい先生方にとっては、**毎回の原稿づくり**が大きな負担になることも。ここでは、AIに「文章やアイデアのたたき台」を用意させ、最終的に教師が仕上げる流れを活用するヒントを紹介します。

4-3-(1) 学級通信づくりのポイント

■ 「定型フォーマット」をAIに整えてもらう

- たとえば、「学級通信の構成を教えてください。導入・児童の様子・行事のお知らせ・ひとことメッセージ、という項目で書きたい」とAIに伝えると、
 1. 挨拶・季節の一言

2. 今週の授業や子どもたちの活動報告

3. 今後の予定

4. 教師からのメッセージ

など、**段落の構成例**を提案してくれるかもしれません。

- これをベースに、**自分の学級ならではの要素**（エピソードや写真、具体的行事など）を加えて完成させる形がスムーズです。

■ 文面を短縮・補足するテクニック

- AIに「短めで、子どもに呼びかける調子の文章にして」と追加で指示すれば、一文一文が短くなり、子どもや保護者にとって読みやすい文章に近づきやすいです。
- 反対に、「もう少し詳しいエピソードを加えて」と依頼すれば、より具体的な説明に広げることができます。

4-3-(2) 季節の話題や学級の雰囲気伝える表現

■ 季節のあいさつや行事紹介

- 「秋を感じさせる短い挨拶文を、3パターン提案してほしい」などとAIに尋ねると、枯れ葉や紅葉、収穫の話題など、季節感のある表現をいくつか教えてくれます。
- そこに**学級ならではのトピック**（運動会の練習の様子、ハロウィンのお祝いなど）を織り交ぜれば、オリジナルの季節便りに仕上がります。

■ 子どもの成長やクラスの雰囲気を伝えるフレーズ

- 「子どもたちが頑張ったことを讃える文章」「保護者にも一緒に喜んでもらうような文面」を、AIにいくつか提案させると、**ポジティブな言い回しのバリエーション**が増えます。
- たとえば「今週は、掃除の時間にすすんで動く子が多く、教室がピカピカになりました！〇〇さんが率先して声かけをしてくれたおかげですね。」といった文例のきっかけをAIから得ることも。

4-3-(3) 学級通信の時短化で教師の負担軽減

■ AIに助けてもらう「部分依存」のスタイル

- 全文をAIに作ってもらうと“無機質”な印象になりやすいため、「**季節のあいさつ**」「**児童の頑張り紹介**」「**ワンポイント学習のヒント**」など、いくつかの要素だけAIに任せる運用がおすすめです。
- 例：「記事A（季節の話題）と記事B（今週の子どもたちのエピソード）は教師が書き、記事C（保護者向け注意点）はAIの下書きを活かす」といったバランス。

■ 子どもの実名や具体的エピソードを扱う際の注意

- 学級通信で**具体的な子どもの名前や写真**を載せる場合、保護者の同意や校内規定に従う必要があります。AIに入力する際はもちろん**個人情報**を避けるのが鉄則です。

- 最終的には教師が「この表現で子どもや保護者が喜んでくれるか？プライバシーや個別配慮は十分か？」を見極めましょう。

■ 事例コラム：通信作成で時短&クラスが盛り上がった（架空の事例）

● 事例 1：週 1 回発行が無理なく継続

「毎週火曜日に学級通信を出すことにしたけど、文章ネタが尽きがちで…。そこで、AIに『今週の教室で見られた子どもたちの成長例を短い文章に』と頼んだら、励ましフレーズのヒントがもらえました。最後は自分の言葉に変えるけれど、下書きの負担が減り、継続しやすくなりました。」

● 事例 2：季節のコラムで保護者に好評

「学年便りに季節のミニコラムを毎回入れています、ネタ切れ気味。AIに『春を感じさせる豆知識』や『子どもが楽しめる季節の遊び』を尋ねたら色々出てきたので、保護者向けに少し編集して掲載したところ、『読んでいて楽しい』と好評でした。」

● 事例 3：子どもたちが話題に乗りやすい

「通信にAIからもらった文章をそのまま載せるのではなく、『〇〇さんが最近発見した驚き』みたいに自分のクラスの実話を絡めて脚色すると、子どもたち自身が『あ、これ俺のことだ』と感じて一体感が生まれました。」

〈次節へ〉

学級通信や学級だよりは、**教師の言葉でつづるからこそ温かみ**が出るものですが、その下書きや表現のヒントをAIに求めることで、作成時間を短縮しつつ内容の充実を図れます。次の節(4-4「学級経営での活用：多角的なアプローチ」)では、学級運営全般や行事計画などにAIを応用する事例を紹介し、より**包括的な学級づくり**をサポートする視点を探っていきます。

4-4. 学級経営での活用：多角的なアプローチ

学級経営は、毎日の学習指導はもちろん、**年間を通じた行事運営や学級のルールづくり、子ども同士の関わり合いをデザイン**する総合的な仕事です。教師一人がアイデアを出し続けるには限界もありますが、AIにヒントを求めれば、**新たな視点**を得られたり、**作業効率化**につながったりする可能性があります。

4-4-(1) 学期始め・行事運営の計画づくり

■ 学期始めのオリエンテーションや係活動

- 例：「学期始めに行う“学級のきまり”を作る活動で、子どもたちにどんな話し合いをさせると効果的か？」とAIに尋ねる。
 - クラス内のルールをゼロから決めるアイデアや、話し合いを活性化する質問リストなどが提案されるかもしれません。
- **教師が最終的に学年や学校の方針**と照らし合わせ、「採用できる部分」「修正が必要な部分」を選び取ることがポイント。

■ 行事計画と役割分担

- 運動会や学習発表会、遠足などの大きな行事を計画する際、「当日の進行スケジュール」「準備リスト」などを AI に作成させると、**抜け漏れがないかのチェック**にも活用できます。
- 例：「学習発表会で子どもたちに演目を決めさせるプロセスのアイデアを 5 つ挙げてほしい」と入力し、多角的に検討してから最終決定すると、より納得感のある行事運営につながるでしょう。

4-4-(2) 学級活動の企画アイデア

■ レクリエーションや係活動へのヒント

- 「雨の日の休み時間に教室でできるレクリエーションを複数提案して」と AI に依頼すれば、ゲームや工作アイデアなどの例が複数提示されます。
- それを**実際の教室サイズや子どもの好み**に合わせてアレンジし、クラス全体で楽しめる活動を設計可能です。

■ 委員会やリーダー育成

- 高学年のリーダー育成など、児童主体の活動を活性化するために、「リーダーシップを育むためのミニ研修案」を AI に尋ねると、「目標設定の仕方」「他者を認め合うゲーム」などが返ってくるかもしれません。
- 実行の際には**学校全体の計画**や他学年との連携も考慮しながら、AI 提案の要素を取り入れていくイメージです。

4-4-(3) 学級経営全般へのトラブルシューティング

■ 子ども同士のちょっとした揉め事

- 例：「中学年の子ども同士が些細なことで言い合いになる場合、どう受け止め、どんな声かけが有効か？」
- AI は一般論として「まず双方の話を公平に聞く」「問題を明確化してからルールや譲歩点を考える」などを提案するでしょう。
- 教師は**クラス特有の人間関係**を踏まえ、本当に適切かどうかを吟味する必要があります。

■ 保護者同士の意見対立など

- 運動会の応援席や行事の出し物などで、保護者間の意見が対立するケースも。
- AI に「保護者同士が意見で衝突しないようにする進行方法」を尋ねると、「事前アンケートで意見をまとめる」「可能なら保護者代表を決める」「複数案を提示して多数決ではなく合意形成をめざす」などが提案されるかもしれません。
- 実際には管理職や PTA 役員の方とも連携し、落としどころを探る必要があります。

4-4-(4) 実践例・コラム（架空の事例）

■ 事例 1：行事の進行表を AI に作らせ、漏れを防止

「運動会の進行表を作る際、AI に『学校行事の進行でよく見落とされるポイントを教えて』と聞いたところ、放送機材の点検、予備の審判ゼッケン、救護体制…など意外と細かいチェックリストが得られました。最終的に学校独自のリストと照合して、準備がスムーズに進みました。」

■ 事例 2：学級活動のテーマ探し

「クラスのレクリエーションが毎回ワンパターンだったので、AI に『室内でできる低学年向けゲーム』を聞いてみたら、いくつか子どもが楽しそうな案が出てきました。元の提案を簡略化・安全対策を加えてやったら好評でした。」

■ 事例 3：予防的なトラブル回避

「学級運営で起こりやすい揉め事の一例を AI に聞き、『係活動の役割分担が不均衡になって不満が出る』などの指摘を参考に、あらかじめ係ごとの仕事リストを平等に配置。おかげで大きな対立が起きずに済みました。」

〈次節へ〉

学級経営という大きな枠でも、**年間行事の運営や日々の活動企画**、さらには**トラブルシューティング**の面で、AI が「**客観的なリストやアイデアを提供する補助役**」として機能する場面は多そうです。ただし、運営方針や最終判断はあくまで教師が責任をもって行い、**校内ルールや保護者との連携**もしっかり押さえておく必要があります。

次の節(4-5「**予防的な生徒指導とリスク管理**」)では、いじめや SNS トラブルなど、さらに踏み込んだ生徒指導面での AI の活用例と注意点を解説します。

4-5. 予防的な生徒指導とリスク管理

小学校高学年になると、子どもたちが SNS やインターネットに触れる機会が増え、**トラブルのリスク**も高まります。また、いじめや不登校を含む深刻な問題は、**未然防止の視点**が重要です。AI は、あくまで「**一般的な対応策を列挙してくれるツール**」として活用し、**最終的な判断や校内の連携**は必ず教師・管理職が担うことが欠かせません。

4-5-(1) SNS トラブルやネットリテラシー指導

■ 小学生が陥りやすい SNS トラブルを洗い出す

- たとえば「小学校高学年がよく巻き込まれる SNS 上のトラブルを、具体例と予防策を合わせて提案して」と AI に頼めば、**誹謗中傷、個人情報流出、なりすまし**などのケーススタディが出てくる可能性があります。
- 授業やホームルームでこれらの例を“**架空のケース**”として扱い、「自分ならどう対処するか」を話し合うプログラムづくりを検討できます。

■ 家庭や保護者に伝える注意点

- SNS リテラシーに関する**保護者向けのチラシ文案**を AI に作成させれば、子どもの個人情報保護・時間管理・保護者の見守り方法などが網羅的に提示されるかもしれません。
- 校内規定や地域の状況に合わせて内容を加筆修正し、保護者会や PTA 広報などで活用すると効果的です。

4-5-(2) いじめ未然防止の視点

■ いじめの発端になりがちなパターンをリストアップ

- 「小学生のいじめでよくある発端例を教えてください」と AI に尋ねると、**SNS のやり取りの行き違い、集団遊びでの除外、好き嫌いの派閥化**などが列挙されるかもしれません。
- これを参考にして、**教室や休み時間で起こりやすい場面**を教師が把握し、普段の見回りや観察で注意するポイントを明確化できます。

■ 指導案や研修会でのケーススタディ

- **校内研修や管理職との打ち合わせ**で、AI が生成した事例を“あくまで一般的な想定”として共有し、教師同士で「こういう場合どうする？」を議論するのも一つの方法です。
- 実際には個々の児童の背景や性格を踏まえる必要があり、**最終判断は学校のいじめ対策チームや管理職が行う**という基本を忘れずに。

4-5-(3) 個別事例の入力 NG と一般化のコツ

■ 個人情報や具体的すぎる状況を避ける

- 児童指導やいじめ対応を AI に相談するときは、「**学年と一般的な状況**」だけに留めましょう。
- 「〇年〇組の〇〇君が…」といった具合に個人特定できる内容は厳禁ですし、家庭環境などセンシティブな情報も入力してはいけません。

■ ケースを一般化して「選択肢を増やす」感覚で利用

- AI からの回答は多くの場合、**一般論・複数の可能性**を示すものです。
- そこから「うちのクラスではどれがあてはまりそう？」「どれが不適切？」を教師が取捨選択し、**学校の方針や同僚教員の意見**も交えながら具体的対策を決定します。

4-5-(4) 事例コラム：失敗と成功を分けるポイント（架空の事例）

■ 事例 1：SNS トラブルを未然に防ぐ授業

「5年生でスマホや SNS に関するトラブル事例を AI に挙げてもらい、授業で『こんなことが起こるかもしれないよ』と子どもたち同士で話し合わせました。具体的な想像ができるようになり、親や教師に相談する重要性が伝わったという声も。」

■ 事例 2：いじめ防止研修での AI 活用

「校内研修で“いじめのきっかけになりがちな場面”を AI に列挙してもらい、教員同士で『あるあるだね』『うちのクラスも気をつけなきゃ』と意識共有。実名や個人情報は使わずにあくまでも一般論として使ったのがポイント。」

■ 事例 3：個別事例を入力しすぎて上司に注意

「ある先生が個人名を伏せているつもりだったが、児童の細かい家庭状況を AI に入力してしまい、校務端末の監査で発覚して問題に。校長から『個人情報の扱いに厳重注意！』と指導を受けた。やはり慎重すぎるくらいが安全と再認識。」

〈次節へ〉

SNS やいじめ対策などの生徒指導領域で AI を活用する際は、**個人情報を伏せた一般化**が鉄則であり、**実際の判断は校内体制で行う**という大前提を再確認する必要があります。

次の章(第 5 章)では、**校務全般**での AI 活用例をまとめ、会議資料や分掌業務などの効率化にフォーカスしていきます。教職員の働き方改革にも直結する内容なので、ぜひ合わせてチェックしてみてください。

第5章：校務での活用

～働き方改革の強い味方～

5-1. 会議資料づくり：ポイントを押さえてスマートに

学校現場では、学年会議・職員会議・分掌会議など、さまざまな会議が定期的に行われます。限られた時間の中で有意義な議論を進めるには、**事前に議題や資料を整理しておく**ことが大切です。しかし議題作成や資料づくりには手間がかかり、他の業務が圧迫されがちです。そこで、AIを活用することで、**事前準備の負担を軽減し、会議そのものの質を高められる**可能性があります。

5-1-(1) 学年会議や職員会議の議題リスト作成

■ 議題の洗い出しを AI に依頼

- 「学年会議で話し合うべきテーマを出し忘れないようにしたい」ときに、AIに「今週の学年会議で確認すべき項目をリスト化してほしい」と依頼。
 - 例：「授業進度」「行事準備の進捗」「学年通信の発行予定」「生徒指導上の懸念」など。
- もちろん学校独自の事情もあるため、AIのリストを“たたき台”にして、教員が最終的に取捨選択します。

■ 報告事項と協議事項の区分

- 時間が限られた会議を効率よく進めるために、「報告事項と協議事項を明確に分けたい」とAIに伝える。
 - AIからは「報告事項はあらかじめ文書で共有」「当日は協議事項に時間を使う」という会議運営の基本的なコツが返ってくることも。
- 事前にAIで作成した“**議題リスト+時間配分**”を参考に、会議案内を出せば、参加者全員が目的を把握しやすくなります。

5-1-(2) 議事録の雛形や要約づくり

■ 議事録フォーマットのたたき台

- 会議終了後に議事録を作成するとき、まず**議事録の雛形**をAIに作ってもらおう。
 - 例：「議題別に項目立てし、決定事項・保留事項・担当者を明示する構成」など。
- 校内のルール（学年会議のフォーマット、職員会議の公式記録など）を踏まえ、**最終的には既存の書式に当てはめる形**をとります。

■ 要点要約のサポート

- もし会議メモや発言内容がテキスト化されている場合（個人のメモ程度でもOK）、AIに「この文章を要約して議事録向けに整理してほしい」と依頼する方法も。
- 個人名や機密情報が含まれる場合は、その部分を削除・置き換えしてからAIに入力し、**情報漏洩**を防ぎます。

5-1-(3) 引き継ぎ資料への応用

■ 学年主任や分掌担当の引き継ぎファイル

- 年度末や異動時に作成する引き継ぎ資料は、**仕事の流れやノウハウ**が凝縮された重要な文書です。
- AIに「引き継ぎで漏れがちなポイント」を挙げてもらい、**マニュアル作成のテンプレート**を得る。
 - 例：「年間行事予定」「備品の管理場所」「地域行事との連携ポイント」「過去の反省点」など。
- それを元に、自分の学校や学年の実態を上乗せして、**オリジナルの引き継ぎファイル**を完成させましょう。

■ 継続性を保つためのチェックリスト

- 「年度始めに最初にやるべきこと」「行事準備で必ず確認すること」など、**時系列のチェックリスト**をAIで作り、職員室や共有フォルダに置いておくと、後任の担当者がスムーズに着手しやすくなります。

■ ポイント：AIを使った会議効率化の意義

- **会議資料づくりの時短**によって、教師は**授業準備**や子どもと向き合う時間を増やせます。
- ただし、**個人情報や機密情報**（人事・評価・保護者のプライバシーなど）は入れないのが大前提。
- 会議の最終決定事項や公式記録は、**管理職の承認**が必要な場合が多いので、AIが作成した文書でも必ず“人の目”でチェックして活用しましょう。

〈次節へ〉

会議資料づくりは、学校現場の中でも**時間と労力を要しやすい業務**の一つです。AIに下書きを任せて教師が仕上げるスタイルにより、手戻りや漏れを減らしつつ効率化を図ることが期待できます。次の節(5-2「**文書作成：使える例文集**」)では、保護者への通知や教育委員会への報告など、多種多様な**文書作成**にAIを活かす方法をさらに詳しく紹介します。

5-2. 文書作成：使える例文集

小学校では、保護者や地域、教育委員会などに向けた文書を頻繁に作成します。たとえば「進路説明会の案内」「行事参加の呼びかけ」「PTAへの依頼」「教育委員会への報告文」など、内容も文体もさまざまです。**AIを活用**すれば、あらかじめ定型例文や複数の文案を得て、そこから**学校独自のルールや目的**に合わせた修正を行うことで、作業時間を大幅に減らせる可能性があります。

5-2-(1) 保護者への通知・報告書類

■ 個人面談や保護者会の案内文

- **例1：個人面談の案内文**
 - 「〇学年〇組の保護者の皆さま、いつも学校活動にご協力ありがとうございます。さて、このたび個人面談を以下の日程で実施いたします…」

- AIに「小学校〇年生向けの個人面談案内文を作成してください。日時・場所・持ち物・連絡方法を含めて」と依頼すると、一度に複数の文例が得られる場合があります。

- 教師はそこに**学校名や担任名、具体的日時**などを加筆修正し、最終的なレイアウト調整を行う。

- **例2：保護者会のお知らせ文**

- 学期ごとの保護者会や学級懇談会の案内文をAIに要請し、「もう少しカジュアルに」「短めにまとめて」と追加のリクエストをすれば、**文体調整**が容易にできます。

- 行事参加や学年通信での呼びかけ

- **例：遠足や社会見学の参加依頼**

- AIに「〇月〇日に行う校外学習の保護者説明文を書いて」と頼むと、**持ち物リストや服装の注意点、緊急連絡体制**などの要素が反映された下書きを作成してくれる。
- 実際には、**学校や自治体の安全管理マニュアル**と整合を取る必要があるため、その点は教師がしっかりと加筆・修正。

5-2-(2) 教育委員会やPTAなどへの公文書

- 公的文書の文体・形式

- 「～していただきたく存じます」「敬具」などの公文書スタイル

- AIに「小学校から教育委員会へ提出する文書の書き方例（やや固い公文書調）で」と伝えると、敬語や定型フレーズが盛り込まれた文章が提示される。
- ただし、**地方自治体ごとに微妙に異なる慣例表現や公的書式**があるため、最終的には既存の校務文書と照合して調整が必要。

- PTAや地域団体への報告・連絡

- 「PTA本部に対して活動報告を簡単にまとめたい」「地域の〇〇団体に協力をお願いする文書が欲しい」など、文面自体は定型に近いがニュアンスが難しいケースにAIを活用。
- 「親しみやすいが一定の格式感が欲しい」と指示すれば、**丁寧さとフランクさをバランス**させた文章を提案してもらえるかもしれません。

5-2-(3) 報告文やお知らせ文のアレンジ術

- AIを活用した「文体の切り替え」テクニック

- 「もっと短くまとめて」

- やや長い案内文を要約して、保護者が一目で大事な情報を把握できる形にする。

- 「もう少し親しみのある口調に」

- 学校だよりに載せるちょっとしたお知らせなどで、硬すぎる文体を柔らかくする。

- 「箇条書きメインにして」

- 連絡事項や持ち物リストを箇条書きにした方がわかりやすい場合の指示。

■ 注意点：個人情報や機密保護

- 報告書やお知らせ文の中に**個人名・成績データ・特別支援の詳細**などが入らないよう注意。
- AI の提案をもとにした文章を外部に出す前に、**管理職や関係部署**と共有し、機密情報が含まれていないか最終確認を徹底しましょう。

■ 事例コラム：AI で時短&質アップ（架空の事例）

● 事例 1：個人面談の案内がスムーズに

「いつも使っている文面を流用していたら、今年度の時間帯変更を入れ忘れがち。AI に『小学校 4 年生の個人面談案内文』を作らせてから自分で最終調整する方法にしたら、**抜け漏れチェック**がしやすく、文面が整いやすくなりました。」

● 事例 2：保護者への報告文が“読みやすい”と好評

「年度初めのクラス懇談会のお知らせを AI に作らせてみました。いつもより親しみやすい語調だったので、保護者から『ちょっと固い感じが減って、読みやすい』と声がありました。要点もわかりやすく、**参加率アップ**につながった気がします。」

● 事例 3：PTA への礼状作成

「行事協力をしてくれた保護者へ感謝の気持ちを伝える礼状をサッと作りたくて、AI で雛形を一度に数パターン生成。『式典の雰囲気に合わせて、ややフォーマル』『カジュアル寄り』など試し、最終的に学校の慣例に合う文を完成させました。」

〈次節へ〉

保護者向け通知や公的報告書類など、文書作成の場面で AI を活かせば、**下書き・文案づくりの時間**を短縮しつつ、**複数の文体からベストなものを選ぶ**という使い方ができるでしょう。

次の節(5-3「校務の効率化：時間を生み出す工夫」)では、文書作成以外にも**行事計画や分掌業務**といった校務全般で AI を活用するノウハウを紹介し、教師の働き方改革をさらに推進するヒントを提供します。

5-3. 校務の効率化：時間を生み出す工夫

校務とは、教師が授業や児童指導以外に担う、**行事運営・分掌業務・委員会活動・施設管理**など多岐にわたる仕事を指します。小学校では行事や各種書類対応が多く、年度末やイベント前には忙しさがピークに達しがちです。AI を活用して**作業の重複や漏れを減らし、先回りして準備**できる仕組みを作れば、教師がより子どもたちに向き合う時間を確保できるでしょう。

5-3-(1) 行事計画のスマート化

■ 大きな行事の全体像を AI に案出しさせる

- **運動会や学習発表会、遠足・社会見学**など、学校全体で関わる行事では「必要な準備物」「進行スケジュール」「安全管理」などの項目が多岐にわたります。

- AIに「〇〇行事の企画書案を作ってほしい。準備物リストや注意点を含む」と依頼すると、全体像が整理されたたたき台が得られることがあります。
- 実際には学校独自のやり方や地域ルールがあるので、AIの結果をカスタマイズして最終計画を仕上げましょう。

■ 進行表・シミュレーションで漏れ防止

- 行事当日のタイムテーブルをAIに作らせ、「準備時間」「休憩時間」「代替プログラム」などを補足すると、全体の流れを可視化しやすくなります。
- 「雨天時の代替案」「保健室の救護体制」などもリストアップさせれば、意外と見落としがちなポイントが浮上し、行事当日に慌てずに済む可能性が高まります。

5-3-(2) 分掌業務のタスク管理

■ 分掌担当者が把握すべき業務

- 生徒会担当、ICT担当、研修担当など、担当ごとに年度内でやるべき仕事¹が散らばっているケースがあります。
- AIに「生徒会担当の1年間の主な仕事をリスト化して」と求めると、選挙管理、行事運営、予算管理などの項目が挙がる場合があります。
 - もちろん、各学校の状況によって違いはあるので、ここでも“チェックリストのたたき台”として利用し、自分の学校の実態に合わせて足したり削ったりします。

■ タスク管理シートの作成

- 「4月・5月の生徒会担当がやるべきこと」「6月・7月の研修担当の仕事」といった形で、月別のToDoリストをAIに作成させると、年度を俯瞰しやすくなります。
- オンラインの共有フォルダなどに置いて、同僚と連携しながら進捗管理することも効果的です。

5-3-(3) 次年度への準備と引き継ぎ

■ 年度末のバタバタを軽減するために

- 学年末は成績処理やクラス替え準備、行事の締めや書類の整理など、教師にとって最も忙しい時期のひとつです。
- 早い段階でAIに「年度末に整理すべき項目を一覧にしてほしい」と指示し、事前チェックリストを作っておけば、計画的に作業を進めやすくなります。

■ 引き継ぎ資料を漏れなく

- 異動や担当替えがある場合、後任の先生に細かいノウハウや時期別の注意点を伝えるのは、想像以上に手間がかかる作業です。
- AIに「4月から3月まで、学年主任が準備・実行すべき主な行事や会議項目を挙げて」と依頼して、1年間の流れを整理。

- それを“たたき台”にして、**学校特有のルール**（地域行事の連携、PTAの動きなど）を付け加えれば、**後任が安心してスタート**できる引き継ぎ資料になるでしょう。

〈次節へ〉

校務効率化の目的は、単に仕事を早く終わらせるだけでなく、教師がより子どもとの対話や教材研究に時間を使えるようにすることにあります。AIを上手に活かしながら行事計画や分掌業務、引き継ぎ作業をスリム化すれば、教師自身の働き方改革にも大きく貢献するはずです。

次の節(5-4「次年度への見通し：計画的な校務運営」)では、年間計画や校内研修など、もう少し先を見据えた運営や教師のキャリア支援にAIを活かす視点を紹介します。

5-4. 次年度への見通し：計画的な校務運営

校務は年度が切り替わるたびに内容が大きく変わることが多く、**来年度の行事日程や人事異動**なども絡んで複雑になりがちです。早めに**年間計画や研修の見通し**を立てておけば、担任業務や分掌業務、教科指導とのバランスが取りやすくなるでしょう。ここでは、**AIに年度計画案を作成させたり、研修資料を下書きしてもらったり**する実践例をご紹介します。

5-4-(1) 年間計画の作成サポート

■ ざっくりとした年間スケジュールをAIに依頼

- 「4月から3月までの学校行事や学習計画を見通して、月ごとの主なイベント・タスクを洗い出してほしい」とAIに頼むと、
 - 新年度準備・PTA総会・運動会・文化祭（学習発表会）・卒業関連行事など、**主要イベントを列挙**してくれるかもしれません。
- 自校の行事や地域行事をAIのリストに加えつつ、**校務分掌との連動**を確認すれば、**担当者ごとの負担やタイミング**が見やすくなります。

■ 学習指導案との調整

- 一方、学習指導要領や学期ごとの授業計画とも連動して考える必要があるため、**学校行事を中心とした年間計画**だけでは不十分な部分があります。
- 「5年生の担任で、5月に運動会、10月に遠足、2月に総合的な学習の成果発表会がある」という情報をAIに伝え、**学習計画と行事計画をざっくり整合**させる相談も可能です。最終的には教科担任や学年主任などと**校内調整**を経て仕上げましょう。

5-4-(2) 研修や研修資料の整備

■ 校内研修や教員研修でのプレゼン資料づくり

- 例：「年度末に予定しているICT活用の校内研修用に、パワーポイントの構成案を作ってほしい」とAIに依頼。
 - 「導入（研修の目的）→実践事例→グループワーク→まとめ」という流れを提案してくれる可能性あり。

- できあがった構成案をもとに、**具体的な校内事例やデータ**を加筆して独自の研修資料を完成させる流れがスムーズです。

■ 研修レポートや研究授業のまとめ

- 教師が行う公開研究授業や勉強会の**振り返りレポート**をAIに下書きさせる方法。
 - 「研究授業の振り返りを箇条書きでまとめたい」「成功事例と課題をリストアップしてほしい」などと依頼すると、**構成のたたき台**が得やすいです。
- ただし、授業の具体的内容や子どもの反応など、**個人情報に触れる可能性**がある部分は常に注意しながら入力を行いましょう。

5-4-(3) 教師自身のキャリア支援

■ 実践の振り返りシート

- AIに「自分の授業実践を客観的に振り返る質問リスト」を作ってもらおう例。
 - 例：「狙い通りの学習効果は得られたか?」「児童の主体的な参加はどの程度だったか?」「評価方法は適切だったか?」など。
- こうした視点を参考に、**教員自身が研修ノートやポートフォリオ**を充実させていけば、日々の実践力向上につながるでしょう。

■ スキルアップ計画や研修プラン

- 「校務と授業の両立をしながら、どうスキルアップすればいいか?」という長期的な視点でAIを活用する例も考えられます。
 - 例：AIに「若手教員が1年間で成長するためのステップを教えて」と依頼し、得られた提案を**先輩教員や管理職とすり合わせ**ながら実際の行動目標を決める。
- 結局、行動を起こすのは教師本人ですが、**客観的なフレームワーク**をAIに出してもらおうと計画づくりが捗るかもしれません。

〈次節へ〉

次年度への見通しを立て、計画的に校務を運営するために、**AIが作り出す“たたき台”**は非常に心強い存在になり得ます。ただし、行事や研修内容などは**学校や地域の固有事情**に強く左右されるため、**必ず校内・学年内で最終調整**を行うことが大切です。

次の節(5-5「まとめ：手際よく、でも丁寧に」)では、第5章全体を振り返りながら、校務でAIを使うときの注意点やポイントを再度整理します。働き方改革の視点から、より豊かな教育活動を実現する一助となるよう、最後に重要事項を確認しましょう。

5-5. まとめ：手際よく、でも丁寧に

第5章では、**会議資料づくり・文書作成・校務全般の効率化**を中心に、AIがどのようにサポートできるかを具体的に見てきました。校務は小学校教師にとって、授業や児童指導と並ぶ大切な業務ですが、手続きや書類作成に時間

が取られすぎると、肝心の子どもと向き合う時間や教材研究の時間が削られてしまいます。ここでは、改めて校務効率化における AI 活用の重要ポイントを整理します。

5-5-(1) 効率化の先にあるもの

■ 児童の学びと成長を支えるために

- AI で書類作成や議事録づくり、行事計画などの時間を削減する目的は、**教育活動の質を高める**ことにほかなりません。
- 書類作成にかかる時間を減らした分、授業アイデアの検討や児童の個別支援、保護者とのコミュニケーションによりエネルギーを注げるようになるでしょう。

■ 働き方改革としての意義

- 過度な残業や持ち帰り業務は、教師の心身に負担をかけるだけでなく、**指導の質**にも影響を与えかねません。
- AI を「業務の一部を代替・補助してくれるパートナー」と捉え、校務全体の効率化を進めることで、**働きやすい職場環境**と**子ども主体の教育**を両立しやすくなります。

5-5-(2) 校務での AI 活用における注意点

■ 個人情報・校内機密情報の保護

- AI に業務内容を入力する際は、児童や保護者、教職員などの**個人が特定される情報**を含めないのが鉄則。
- 校務文書でも、未公開の人事情報や試験問題など、**機密性の高い内容**は入力してはいけません。

■ 最終確認のステップを怠らない

- 会議資料や公的文書などは、最終的に**管理職や上長の承認**を得る場合がほとんどです。AI が作成した下書きでも、必ず**人間の目でチェック**し、学校・自治体のルールに則った形に整えてから発行しましょう。

■ AI への過度な依存に注意

- AI の提案はあくまで**たたき台**であり、現場の実態や前年度の反省点などを踏まえた**教師の判断**が不可欠です。
- 書類の形式や文言は最適でも、**現状にそぐわない運用案**が提案されることもあるため、常に取捨選択の意識を持つことが大切です。

5-5-(3) 次章へのつながり

● 第 6 章：実践的な活用シーン

第 5 章までで、授業づくり・児童指導・校務の 3 つの柱を一通り見てきました。次の章では、より具体的なシチュエーションや事例をピックアップし、**実際の活用イメージ**をさらに広げることをめざします。

● ガイドラインの再確認

校務効率化の観点でも、**個人情報保護やセキュリティ**のルールを再確認しながら進めるのが安全です。校内や自治体のガイドラインをチームで共有し、**定期的にアップデート**していくと良いでしょう。

〈第5章まとめ〉

- 会議資料や文書作成での活用により、教師が時間を大幅に節約できる可能性。
- 行事計画や分掌業務でも、AIのチェックリスト作成機能が有用。
- 重要なのは、“効率化”の先にある教育の質向上と、児童一人ひとりを丁寧に見守る時間を確保すること。

AIを味方に、校務をよりスリム化し、子どもたちとのコミュニケーションと学びに力を注げる学校づくりをめざしましょう。

第6章：注意点とリスク管理

～安心・安全な活用のために～

6-1. 個別最適な学びへのアプローチ

■ なぜ「個別最適化」が注目されるのか

近年、「一斉授業」だけではなく、一人ひとりの児童の得意・苦手や興味関心に寄り添う学びが求められるようになってきました。学級単位で同じ進度を追うだけでなく、必要に応じて補充学習や発展学習を柔軟に提供できれば、児童の学習意欲と達成感を高めやすくなります。AIは、その個々のニーズに合ったアイデアや教材のたたき台を提示してくれる可能性があります。

6-1-(1) 学習の個別化・パーソナライズ

● 基礎学力と得意分野を両面サポート

- **算数が得意な子、国語が苦手な子**など、同じクラスでも学力レベルや得意・不得意分野はさまざまです。
- AIに「小学〇年生の算数で、すでに学年相当以上の力がある児童向けの発展問題を3つ作ってほしい」などと尋ねると、**レベルの高い応用問題**を得られるかもしれません。
- 逆に「漢字が苦手な子向けに、1文字ずつ丁寧に学べるワークシート案を考えて」と頼めば、補充学習に活かせるヒントが得られるでしょう。

● 個別指導案の参考に

- 特別支援が必要な子や不登校気味の子などに対して、「こんな性格特徴の児童がいる場合、授業でどうフォローすればいいか？」と**抽象化した上で**AIに相談。
- AIから複数の対応策が提示されたら、**学級や児童の実態**に合ったものを教師が取捨選択し、個別指導計画に落とし込むイメージです。
- もちろん、実際の個別指導は**教師が子どもの様子を観察しながらリアルタイムに判断**するのが基本であり、AIの情報はあくまで補足的役割という点を忘れないようにしましょう。

6-1-(2) 補充学習・リメディアル指導

● つまずき単元を把握する

- AIに「小学〇年生の算数（分数の足し算）で、子どもがよく勘違いしがちなポイントと対処法を教えてください」と尋ねると、
 - 分子だけ足してしまう誤り
 - 単位分数の理解不足
 - イメージ化（図解）が不足
など、**事前に押さえておきたいポイント**が挙がるかもしれません。

- これをもとに、補充プリントやミニテストを作る計画を立てておけば、**先回り支援**が可能です。

- やさしい解説や別視点の例示

- 児童がある単元で行き詰まったとき、AIに「もう少しわかりやすい例や具体物を使った説明方法」を聞くと、新しい切り口が見つかる場合があります。
 - 「水そうを使った体積の例」「実際の買い物に結びつけた文章題」など、多角的なイメージを提案してくれることも。
- 実際には、**どんな説明がその子に響くか**を見極めるのは教師であり、AIの提案をカスタマイズする力が求められます。

6-1-(3) 教師の立ち位置と最終判断

- AIはあくまで補助ツール

- ここまでの例からわかるように、**AIが提案する教材や指導法は「たたき台」**です。
- 児童の性格や学習履歴、クラス全体の雰囲気などは、AIには把握しきれません。**教師が現場で観察し、判断する部分**が一番大切です。

- 個人情報に注意しながら

- 個別最適化のために詳しい情報をAIに入力したくなるかもしれませんが、**名前や具体的な家庭事情、学習評価などを入力するのはNG**です。
- 学習履歴や成績データを扱う際は、「**抽象化**」「**仮名化**」を徹底して安全を確保します。

- 「一斉指導」と「個別最適化」の両立

- 個別最適化といっても、授業全体の流れや学年のカリキュラム進行は必要です。
- AIで得た発展問題や補充プリントを**放課後指導や個別サポート**に活かすなど、時間帯や学習形態を工夫すると、自然な形で「個別最適化×集団学習」を両立できるでしょう。

〈次節へ〉

「個別最適な学び」は、小学校現場でこれからますます重要視されていくテーマです。AIの活用は、一人ひとりに応じた**課題やアクティビティ**を設計するうえで、新たなアイデア源になるかもしれません。ただし、最終的には**教師が子どもの表情や反応を見ながら微調整**する姿勢が不可欠です。

次の節(6-2「**課題解決型・探究学習でのシーン**」)では、総合的な学習や探究活動など、より広い**視野**でAIを取り入れる具体的なシーンを紹介します。子どもたちが主体的にプロジェクト学習を進める際のAI活用について、一緒に考えていきましょう。

6-2. 課題解決型・探究学習でのシーン

■ 子どもの「もっと調べたい」をサポートするAI

総合的な学習の時間やプロジェクト型学習などでは、**子ども自身が主体的にテーマを選び、探究を深める**ことを目的とします。教師はファシリテーターとして、**必要な情報や視点を提供**しながら、子どもたちの興味関心を広げて

いく役割を担います。ここで AI を上手に取り入れると、調べ学習や情報整理の一助となり、より深い学びへとつなげられる可能性があります。

6-2-(1) 総合的な学習の時間でのプロジェクト支援

● 事前のテーマ探し・情報収集の段取り

- 例：子どもが「地域の河川環境」をテーマに探究したいと思ったとき、**教師が AI に事前に相談**しておけば、
 1. 想定される調査項目
 2. 安全面の注意（河川敷を歩く際のルールなど）
 3. どのような視点でまとめると良いかなどの選択肢を得やすくなります。
- 子どもに直接 AI を使わせる場合は、**情報モラルや検索リテラシー**の指導が必須です。また、個人情報を入力しないよう事前にルールを定めましょう。

● 子どもの疑問を広げる「問いかけ」

- 子どもたちが探究の入り口で止まらないように、**発散的に問いを出す**プロセスが大切です。
- 例：「地域の安全について学ぶプロジェクトに取り組む 5 年生に、話し合いを活性化するための問いを 10 個考えてほしい」と AI に頼むと、**多角的な切り口**（交通・防災・子ども目線など）が出てくるかもしれません。
- 教師はそこからクラスに合った問いを選び、探究の方向性をサポートします。

6-2-(2) データ分析やアンケート集計の下支え

● アンケートや簡単な数値分析

- 子どもたちが「友だち関係」や「給食の残菜状況」などをアンケート調査した場合、**集計データをどう読み解くか**でつまづくことがあります。
- AI に「小学校で実施したアンケートの結果（ただし個人情報は含めない）を入力して、考察のヒントをもらおう」方法をとれば、
 1. 子どもが見落としがちな傾向
 2. グラフ化のアイデア
 3. 深掘りすべき追加質問の提示などを得られるかもしれません。
- もちろん、実際の分析やまとめは**子ども本人**が主体的に取り組むことが大切であり、AI は補助役です。

●統計リテラシーの教材作成

- 「5年生向けに、アンケート結果の見方を教えるワークシート案を考えてほしい」とAIに相談すれば、
 - 比較する項目の設定例
 - 円グラフや棒グラフの使い分け
 - 誤差やバイアスの概念への簡単な触れ方などのたたき台が得られる可能性があります。
- これを元にして教師が**クラス実態**（学力、興味など）に合わせて仕立て直せば、より分かりやすい教材に仕上げられるでしょう。

6-2-(3) 学年・学級を超えたコラボ学習

●教科横断的なアイデアの提案

- 例：「**算数（データの扱い）×社会（地域調査）×国語（まとめの文章作成）**」というプロジェクトで、AIに「この3教科が連携する学習アイデアを複数提案して」と依頼。
- AIの案をもとに、学年や同僚の先生と相談して**カリキュラムを再設計**し、全体像を組み立てると効率的かつ充実した探究活動に発展しやすくなります。

●全校的な探究イベント

- 学校全体で行う**プロジェクト発表会**や**展示会**などに向けて、AIに「発表の進行プログラム案」「ステージ発表と展示コーナーの配置をどう考えるか」などを尋ねると、
 - 役割分担の例（進行、受付、案内係など）
 - 展示の演出アイデアなどが得られるかもしれません。
- 最後は、**校内ルールや安全面**を考慮してカスタマイズし、実施計画に反映します。

〈次節へ〉

課題解決型・探究学習の場では、子どもたちが**自分の力でテーマを深める**ことが第一です。一方で、**情報収集や分析の段階**でAIを取り入れれば、単なる手間削減だけでなく、**視野を広げるヒント**としても効果的です。

次の節(6-3「**協働学習やグループ活動のサポート**」)では、**グループワーク**や**協働学習**の場面でAIを活かす方法を紹介します。話し合いの進行や発問の作成など、教師がファシリテーターとなる際にもAIのヒントが有効かもしれません。

6-3. 協働学習やグループ活動のサポート

■子どもたちの「思考」を引き出す教師のファシリテート

グループ活動や協働学習では、教師が**一歩引いて見守りながら**、必要に応じて「問いかけ」や「場づくり」を行うことで、子どもたちの主体性を引き出します。そこにAIを適切に取り入れると、**新しい発想や話し合いの活性化**が

期待できるでしょう。

ただし、AIが直接子どもの代わりに考えてしまうと、**学習の主体がAIになってしまう**リスクもあるため、教師が場をコントロールする工夫が大切です。

6-3-(1) 発問例や議論の進め方をAIが提示

● グループディスカッションを盛り上げる「問い」の作成

- 例えば、「小学校5年生が『学校をもっと楽しくするアイデア』を話し合うとき、どんな発問をすると多様な意見が出やすいか？」とAIに依頼。
 - 「もし費用や時間に制限がなかったらどうする？」「他の国の学校と比べてみると？」など、発散的な問いが提案される可能性があります。
- そうした「問いリスト」から、**クラスの特性や学年の理解度**に合うものを教師が選んで掲示すると、子どもたちのディスカッションが活性化しやすくなります。

● 話し合いの進行モデル

- 「グループで意見をまとめるときに役立つステップを3つ挙げてほしい」とAIに聞けば、
 1. アイデアのブレインストーミング
 2. 意見を整理・グルーピングする
 3. 優先度や実行可能性で選ぶなど、**一般的なファシリテーション手法**を提案してくれるかもしれません。
- 教師がそれを「低学年向け」「高学年向け」などにアレンジし、**学級活動の進行スライド**や**板書計画**に落とし込むと、よりスムーズな協働学習を進められます。

6-3-(2) モデレーション・ファシリテーションのヒント

● 意見が出にくいグループへの追加質問

- 児童同士が意見をうまく言葉にできない場合、AIに「話し合いが停滞したときの切り返しの問い」を聞く方法があります。
 - 「もし反対意見を言う人がいたらどう思う？」「他の教科や生活場面に応用できない？」など。
- こうしたサポートを教師が随時見せることで、「意見が出ないときに、こんなふうに話を深めるんだ」という**学習者モデル**を子どもたちに提示できます。

● 役割分担のアイデア

- 「4人グループで協働学習するとき、どんな役割を作ると話し合いが円滑になるか？」とAIに尋ねると、**司会・記録係・タイムキーパー・意見まとめ役**などが提案されるケースがあります。
- 教師は、それをクラスの状況に合わせて命名を変えたり、人数の都合で統合したりして調整できます。

6-3-(3) 組み合わせ例：AI×プロジェクト学習

● 科目横断のグループプロジェクト

- 例：「国語×社会×ICT」の複合的なプロジェクトで、グループごとにテーマを設定し、調べ学習やインタビュー、ポスター作成などを行う場面。
- AIに「プロジェクト全体の進行表」「1時間ごとの目標」を試しに作ってもらいと、**グループ活動の全体像**が見やすくなるかもしれません。

● 仕上げ段階での「もう一工夫」支援

- 発表用資料やプレゼン、まとめの原稿づくりで「分かりやすい書き出し」「インパクトのある締め」などをAIが提案し、それを**児童が自分たちなりにアレンジ**して完成度を高める場面も考えられます。
- ただし、**発表内容の核**はあくまでも子ども自身が考えて表現するものであり、AIは補助輪という位置づけが重要です。

■ ポイント：教師がコントロールする「AIとの距離」

協働学習やグループ活動では、**子ども同士が意見を引き出し合う**ことが最大の狙いです。AIを使いすぎると、**子どもの思考が浅くなる**可能性もあるので、「どのタイミングでどの程度AIの力を借りるか」は教師の判断にかかっています。

1. **最初からAIを使わず、子どもが出せる意見を出してもらう。**
2. **ある程度出し尽くしたあと、AIの提案を比較して新たな視点を得る。**
3. **最終的には子どもたちの意見でまとめる。**

こうした段階的な使い方をすれば、**主体的な学習とAIのサポート**をバランスよく共存させられるでしょう。

〈次節へ〉

教師がファシリテーターとしてグループ活動を支えるとき、AIは**問いかけのヒント**や**ファシリテーションのモデル**を提供してくれる頼もしいパートナーとなり得ます。ただし、子どもがAIに振り回されないよう、**教師が適切な距離感**を持って指導することが大切です。

次の節(6-4「**教科横断的・学校全体での取り組み**」)では、さらにスケールを広げて、学校全体を巻き込んだ**教科横断的な学習**や行事運営、プロジェクトの事例を取り上げます。

6-4. 教科横断的・学校全体での取り組み

■ 教師が「舞台裏」でAIを使い、子どもの学習を支える

教科横断的な学びや大規模な行事では、**複数の学年・教科が連携**し、学校全体が同じ目標に向かって動きます。ここでAIを活用する場合、子ども自身がAIに触れるというよりは、**教師同士が打ち合わせや教材開発の段階でAIの助言を取り入れる**のが主なイメージです。あくまで子どもたちは、教師が準備した学習活動や教材を受け取り、それをもとに主体的に学習を進める流れが基本です。

6-4-(1) 教科連携（国語×社会×ICT など）での取り組み

● 教師同士の打ち合わせをスムーズに

- **例**：地域調べの社会科プロジェクトで集めた情報を、国語の授業で文章にまとめ、最終的に ICT 機器を活用して発表資料を作る。
- このような**教科横断的プロジェクト**を組む場合、**教師間の事前協議**が欠かせません。
 - AIに「国語×社会×ICTのプロジェクト学習で留意すべき点」を問い合わせると、
 1. 教科間連携の目標設定
 2. 各教科での時間配分・実施時期
 3. 成果物の評価方法などが列挙されるかもしれません。
- その提案を参考にしつつ、**学校や地域の行事日程**を考慮して最終的なスケジュールを組み立てれば、連携が取りやすくなります。

● 「舞台裏」で教材開発を効率化

- 社会科で使う資料探しや、国語科での説明文モデル、ICT科での操作手順書などを、それぞれの担当教師が**AIに下書きを依頼**して効率化できる場面が考えられます。
- 子どもたちは、最終的に教師が吟味・修正した教材を受け取るので、**AIと直接やりとりする必要はなし**。
- 全体として教師側の準備時間が短縮され、教科連携がスムーズに進むメリットがあります。

6-4-(2) 行事やプロジェクトを通じた全校的活用

● 学習発表会や文化祭など、大規模行事での裏方支援

- **例**：文化祭で全学年が展示やステージ発表を行う場合、進行スケジュールや部屋割り、発表内容のチェックなどで教師の作業量は膨大です。
 - AIに「文化祭（学習発表会）の全体計画の雛形を作ってほしい。必要な項目や注意点を列挙して」と依頼すれば、**抜け漏れチェック**に役立つでしょう。
- 校内連絡文やプログラム案内文を AI に下書きさせ、最終的に管理職や行事担当が校正・承認することで、**連絡文の作成時間を節約**できます。

● 縦割り班活動や委員会連携

- 全校的な縦割り班活動（例えば「1～6年生が混在する班でクリーン活動をする」など）を企画する際にも、
 - AIに「縦割り班活動でよくあるメリット・注意点を挙げて」と頼むと、**多角的なアドバイス**（年齢差を活かす工夫、下級生の安全確保など）が得られるかもしれません。
- また、**委員会やクラブ活動**との連携計画を AI に作成させ、教師同士で手分けして準備する案を練ると、担当者別に何をすれば良いかが明確化しやすいです。

6-4-(3) 学校全体で活用を広げるポイント

● 職員室での情報共有と研修

- AI 活用をさらに推進するには、一部の先生だけが使うのではなく、職員室全体で取り組みが共有されることが理想的。
- 例：ICT 主任や研修担当が、**実例をもとに簡単な研修会**を開き、「こういう場面で便利」「ここは注意」といったノウハウを職員に展開する。
- 特に**個人情報保護やセキュリティのルール**を共通理解できると、全校的な安心感のもとで AI が導入しやすくなります。

● 管理職との連携

- 行事や学校全体の計画には、**管理職（校長・教頭）の承認**が欠かせません。AI を使って作成した計画書や連絡文も、管理職が内容をチェックし、校務上の不備がないか確認する必要があります。
- 管理職自身が AI 活用に理解を示していると、教師も安心して試行しやすく、学校全体で働き方改革を進めやすいでしょう。

■ ポイント：教師が“影の主役”として AI を使う

- 子どもが直接 AI にアクセスすると、**情報モラルや誤情報、個人情報保護**などの問題が一気に増えます。一方、教師が**舞台裏で AI を活用**し、最終的に「子ども向けに最適化された教材や計画」を作るのなら、リスクを最小限に抑えられます。
- **教科横断的な学びや学校行事全体をデザイン**する際、AI を裏方で使って「抜け漏れ防止」「提案の幅広げ」「資料作成の時短」を図り、結果的に**子どもの学びを豊かに**することが可能です。

〈次節へ〉

本節では、**教科横断的な活動や学校全体行事を舞台に、教師が裏方で AI を活用**する例を見てきました。子どもが直接 AI に触れるリスクを抑えながら、**学校全体の連携や行事の質向上**を目指す、一つの有効な方法と言えます。

次の節(6-5「さらに一歩進んだ使い方：生成 AI + α 」)では、より高度な応用例として、他の ICT ツールとの組み合わせやプロンプトエンジニアリングなど、AI の可能性をさらに広げる視点を紹介します。

6-5. さらに一歩進んだ使い方：生成 AI + α

■ AI はまだ発展途上—でも可能性は無限大

本ガイドで紹介しているような活用法は、生成 AI の“入り口”に過ぎません。AI の機能や性能は**今後さらに進化**していく見込みであり、画像・動画生成やマルチモーダル対応など、多彩な活用が視野に入ってきます。しかし、**技術が進むほど課題も増える**可能性があるため、教師としては「新しい機能が登場しても、安全・倫理面を最優先で検討する」姿勢が大切です。

6-5-(1) 他の ICT ツールとの連携

● スプレッドシートやプレゼンソフトと組み合わせ

- **例**：集計業務で使ったスプレッドシートの内容を、AI に「グラフ化のアイデア」や「分析視点」を聞く。
- 「プレゼンテーションソフトで発表用スライドを作るうえで、どんな構成にすると分かりやすいか」など、**AI+既存ツール**の併用で、教員の資料作成が楽になる場面が考えられます。
- ただし、スプレッドシートに含まれる**個人情報や機密データ**をそのまま入力しないよう、必ず情報を抜き出して要約・匿名化しましょう。

● 翻訳機能や音声入力との組み合わせ

- 外国籍の保護者向け文書や、ALT（外国語指導助手）への連絡文を **AI の翻訳機能**で下書きし、教師が最終チェックするなどの活用例。
- **音声入力**で作成した文章を AI に整形してもらう方法など、効率化につながるアイデアが考えられます。
- これらも、最終的には**教師の目で確認**し、表現の誤りや失礼がないかをチェックすることが必要です。

6-5-(2) プロンプトの活用を深める「プロンプトエンジニアリング」

● 質問（プロンプト）を磨くと、回答がガラリと変わる

- AI に対して「どのように指示を出すか」で、得られる回答の質が大きく変わります。
- たとえば、**状況設定（学年、教科、時間枠）**を詳しく説明したり、「**文章量を 300 字以内に**」や「**親しみやすい文体**」など具体的なオーダーを加えたりすることで、回答の的中率が上がるでしょう。
- これを「プロンプトエンジニアリング（質問設計）」と呼ぶことがありますが、教師のほうが上達すればするほど、**AI を使いこなす力**が高まっていきます。

● 試行錯誤の過程自体が教師の学びに

- 一度の質問で完璧な回答を求めるのではなく、
 1. 大まかな案を作ってもらう
 2. さらに条件を追加して修正を依頼
 3. 最後に細部を調整という段階的なやり取りをすると、AI との“共同作業”感が強まり、**より質の高い成果物**が得られます。
- この過程自体が、教師の課題分析力や伝え方のスキルを磨く機会にもなると言えます。

6-5-(3) 教師の専門性を活かす“AI との対話”

● AI と「対話」しながら授業や資料をブラッシュアップ

- **例**：授業アイデアを AI に聞いた後、

- 「うちのクラスは 35 人で 2 名ほど支援が必要な子がいる」

- 「60 分の時間配分でできる範囲にしたい」

- 「低学年でもわかる具体例に」
と追加指定していく。

- 教師の専門性（子どもの現状や学校の文脈）が AI の提案に加わることで、より現実的なプランを仕上げられます。

- 過度な依存を避け、最後は自分の言葉でまとめる

- AI とのやりとりが長引くと、「これ、子どもたちに合っているか？」という核心を見失う危険も。

- 一定のところで「自分の言葉と経験に基づいてまとめ上げる」フェーズに移り、教師が最終的な方向性を決定する姿勢を持ちましょう。

- 子どもの顔や授業の様子を思い浮かべながら、最終判断するのは教師の専門性の見せどころです。

- ポイント：未来への備えと学び続ける姿勢

- AI はまだ発展途上であり、これから画像・動画生成、マルチモーダル対応など、多くの機能が進化していくでしょう。

- だからこそ、「追いつくのが大変」とあきらめるのではなく、教師自身が学び続ける姿勢が大切です。子どもに直接使わせるリスクを避けつつも、最先端のツールを知り、教育活動に生かす工夫を探っていきましょう。

- 「AI を使えばいい」という短絡的な発想ではなく、使わずにできることとの使い分けも含めて、教師の判断力が試される時代になってきています。

〈次節へ〉

「さらに一歩進んだ使い方」として、他の ICT ツールとの連携や高度な質問設計、教師が AI との対話を通じて授業案を磨くプロセスなどを見てきました。AI の機能が広がれば活用の可能性も増える一方で、安全・情報モラル・教師の専門性がますます大切なことも理解しておきましょう。

次の節(6-6「実践例 Q&A：現場の声に答えて」)では、具体的によくある疑問や課題に対する Q&A 形式の解説を用意し、現場の先生方が抱きがちな悩みをカバーします。

6-6. 実践例 Q&A：現場の声に答えて（架空の事例）

- 現場の先生方からよく聞かれる疑問や悩み

AI を使ってみたいけれど不安がある、あるいは実際に試してみたものの「うまくいかなかった…」と感じる教師も少なくありません。ここでは、そんな現場の声に Q&A 形式でお答えします。すでに触れた内容の振り返りにもなりますので、改めて確認していただければ幸いです。

Q1：「AI を使ってみたものの、思ったほど時短になりません…」

A：まずはプロンプトの具体化や段階的なやり取りを見直してみてください。

- **原因1：質問が抽象的すぎる**

- 例：「楽しい授業のアイデアを教えて」では、AI が漠然とした回答しか返せず、結果的に使いにくい。
- **解決策**：学年や単元、時間配分、学習目標などを具体的に指示し、「箇条書きで5つ」「200字程度で」など条件を詳細に伝える。

- **原因2：回答を1回で済ませようとしている**

- 1度のやり取りで理想のアイデアを求めると、かえって追加修正に時間がかかる場合が。
- **解決策**：「まず広くアイデアを聞く→条件を加えて再提案→最終仕上げ」の段階的プロセスを意識。

Q2：「子ども向きじゃない提案が多くて、結局使えません」

A：AI はあくまで一般的・大人向けの文脈を持つため、教師が子ども向けに加工するステップが必須です。

- **ポイント1：子どもが理解できる文体かどうか**

- 例：「小学生が興味を持てるように、専門用語を使わず、挿絵をイメージしやすい説明を」と伝えるだけでも、回答の方向性が変わる。

- **ポイント2：実際のクラスの実態を加味**

- 「算数が苦手な子」「クラスに落ち着きがない子」などをふわっとした表現でAI に伝え、出てきた案のうち「これはうちのクラスに合いそう」という部分だけをピックアップ。

- **ポイント3：最終調整は教師の目**

- 子ども向けかどうか、子どもが本当に楽しめるかは、最終的に教師の経験や観察でジャッジするかありません。

Q3：「保護者が『AI に任せきりでは?』と心配しているようです」

A：「最終判断や現場のアレンジは教師がしている」ことを、保護者にわかりやすく伝えると安心感が高まります。

- **説明のポイント：**

1. AI は「アイデアの下書き」や「課題のたたき台」を出してくれるだけ。
2. 教師が子どもの姿を見ながら内容を修正し、最終的に授業や文書を整えている。
3. 個人情報を入れないなど、安全面のルールを徹底している。

- **校内のガイドライン整備**

- 学校や自治体で「AI活用ガイドライン」を策定し、教職員間や保護者にも周知すれば、リスクや倫理面での懸念を軽減しやすい。

Q4：「AIに頼りすぎになりませんか？教師の専門性が失われそうで不安です」

A：教師の専門性は、むしろAIの提案を**適切に取捨選択する力**で光ります。

- **AIはあくまで道具**

- 過度な依存は避け、「自分が必要としている部分だけ」「自分の学級に合う部分だけ」を活用し、最終判断はあくまで教師が下す。

- **プロンプトを工夫する力=教師の見識**

- うまい質問を設計するには、単元の狙いや子どもの実態に対する教師の理解が不可欠。
- AIが提示したアイデアをブラッシュアップすることで、教師自身も思考が整理される一面がある。

Q5：「同じ質問なのに回答が違う…再現性がなくて困ります」

A：生成AIの性質上、**毎回同じ回答が出るとは限らない**です。対策としては以下を。

1. **文脈を明示して「前回と同じ方向性で」と補足指示**

- 「先ほどの回答に近い形で、もう少し簡単な例を」と伝え、前回の文脈を引き継いでくれる場合が多い。

2. **メモや履歴の活用**

- 重要な回答はコピペで保存し、後日再利用できるようにする。

3. **試行回数を重ねる**

- どうしても違う答えがほしい場合は、何度か試してみて、最適案を採用する。

Q6：「情報漏洩が怖いんですが…安全面は本当に大丈夫？」

A：「**個人情報を入力しない**」「**仮名化・要約する**」のルールを徹底する限り、大きなリスクは避けられます。

- **やってはいけない例**

- 「〇年〇組の〇〇さんが…」
- 「テスト問題の原文をそのまま入力」
- 「未発表の行事日程や人事情報を詳細に書く」

- **正しいやり方**

- 「小学校3年生で落ち着きがない子を支援したいが、どんな対策が考えられる？」と状況を一般化。

- 校務文書も、機密度が高い部分を抜いた形で相談する。

- **校内ガイドラインの順守**

- 教育委員会や自治体の方針をよく確認し、違反にならないよう慎重に運用。

〈次節へ〉

こうした Q&A はあくまで**代表的な疑問**であり、現場ではさらに細かいケースがたくさんあります。ただし、多くの場合、「**プロンプトの具体化**」「**個人情報の扱い**」「**最終判断は教師**」という基本原則に立ち返れば、大きく迷わずに済むはずで

す。次の節(6-7「**まとめ：未来への可能性と学び続ける姿勢**」)では、AI が今後さらに発展する中で、**教師がどう準備し、どう活用すればいいか**を改めてまとめます。技術が変化しても、教師の専門性や子どもを思う姿勢が根幹にあることに変わりはありません。

6-7. まとめ：未来への可能性と学び続ける姿勢

■ AI はまだ発展途上—進化するテクノロジー

これまで見てきたとおり、生成 AI はすでに教育現場で**大きな可能性**を示していますが、現状はまだ**発展途上**です。今後、

- 画像や動画の生成・編集
 - 音声認識・音声対話
 - マルチモーダル（テキスト×画像×音声など）の総合的な理解
- といった機能がますます高度化していくでしょう。

これらの機能向上が進めば、さらに多彩な教材作成や業務支援が期待できる一方で、**誤情報や著作権・個人情報保護**への懸念も増大する可能性があります。教師としては、**新機能に飛びつく前に、安全・倫理面をチェックする姿勢**が欠かせません。

■ 道具としての AI—磨くほどに光るが、雑に扱えばリスクも

- 「包丁は料理人の魂」とよく言われるように、**AI も大切に扱い、丁寧に使いこなすほど力を発揮**します。
- 雑な質問や丸投げをすると不適切な回答が出て、かえって時間を浪費。
 - 丁寧に条件を指定し、回答を何度かブラッシュアップすれば、短時間で質の高いアイデアや文章を得られる。
 - 逆に、**個人情報を不用意に入力する**などルールを破れば、学校や児童に取り返しのつかないリスクをもたらす恐れも。

結局のところ、**使い方次第**で光にも闇にもなりうる道具です。教師として、**安全・モラル・子どもへの最適化**を常に考えながら扱うことが大切です。

■ 学び続ける教師こそが、子どもを導く

AI の機能が進化すると、「もう追いつけない」と感じる人が増えるかもしれません。しかし、**子どもに未来を見せるのが教師の役割**だと考えれば、

- **変化を拒絶するのではなく、基本を押さえながら少しずつアップデート**していく

- 「完璧に使いこなそう」ではなく、「自分の教育目標に合った使い方を習得しよう」という姿勢を持つことが、これからの教育現場に求められるでしょう。

教師自身が**学び続ける姿勢**を見せることで、子どもたちも「新しいことを取り入れながら前向きに試行錯誤するって大事なんだな」と感じられます。AI時代でも、**人間が主体的に考える力**が教育の核心であることは変わりません。

■ 〈第6章まとめ〉

- **教科や校務を超えた実践的なシーン**では、AIは強力なサポート役になりうる。
- 子どもが**直接使うのではなく、あくまで教師の道具**として安全かつ効果的に活かす方法を探ろう。
- AIの進化にともなう新機能を取り入れるときは、**安全・倫理面を最優先**し、常に教師が判断を担う。
- 「**学び続ける教師**」であることが、子どもの未来を明るく拓くカギ。

これで第6章「実践的な活用シーン」は終わりです。次の章（第7章）では、**注意点とリスク管理**の観点を再度詳しく扱い、**安全・安心なAI活用**のために知っておきたいポイントを整理していきます。

第7章：注意点とリスク管理

7-1. プロローグ：ある職員室での会話（架空の事例）

(1) 不安と期待が入り混じる現場の声

「最近、AI の話題をよく聞くけど、本当に使って大丈夫なのかな？」

「個人情報を入れちゃったら流出しないか心配…」

「でも、業務効率はすごく上がりそうだね。うまく使えば授業づくりも楽になるかも！」

——ここは、とある小学校の職員室。昼休みや放課後になると、先生同士で「AI って便利らしいけど、ちょっと怖い面もあるよね……」という話がしばしば交わされます。

誰もが忙しい毎日の中で、**AI が本当に役に立つなら使ってみたい**と思う一方、**安全や倫理面に対する漠然とした不安**が根強く残っているのも事実です。

(2) なぜ注意点の共有が大切か

教師がAI を使ううえで、まず知っておきたいのは「**リスクをきちんと理解し、安全策をとりながら使う**」という姿勢です。

- **個人情報**を誤って入力してしまう危険
- **著作権や公的文書の扱い**が曖昧なままAI に任せるリスク
- **誤った情報**をそのまま鵜呑みにして、子どもや保護者に伝えてしまう懸念

これらの問題は、どれも学校や子どもたちに大きな影響を及ぼす可能性があります。しかし、**正しい知識とルール**を共有し、教師同士で気をつけ合えば、リスクはかなり低減できるはずです。

本章では、これまで紹介してきたAI 活用の具体例を踏まえつつ、「**こういう場合は要注意**」「**ここは必ず確認しよう**」というポイントをまとめています。教師が安心してAI を使えるよう、**リスク管理の視点**を改めて整理していきましょう。

〈次節へ〉

第7章は、**安全・モラル面**を総合的に押さえるための章です。続く節で扱う「**個人情報の保護**」「**著作権への配慮**」「**正確性の確認**」などの項目を参照していただき、**教師一人ひとりがリスクを理解しながらAI を活用できる**よう、ぜひ確認を進めてください。

7-2. 個人情報の取り扱い：絶対に譲れない原則

AI を使ううえで、**個人情報やプライバシー情報を誤って入力してしまう**のは、最も大きなリスクの一つです。とりわけ、小学校では子どもたちの情報が含まれるため、一度流出すれば取り返しがつかない可能性があります。ここでは、具体的なNG 例とOK 例を交えながら、安全かつ適切に情報を扱うポイントを押さえましょう。

(1) 具体的な NG 例と OK 例

● NG：個人が特定される情報をそのまま入力

- 例：「3年2組の〇〇さんが、授業中に落ち着きがなくて…」
- 例：保護者の連絡先や住所、成績表の詳細
- 例：未発表のテスト問題や校務上の非公開データ

このような情報を AI に入力すると、**外部サーバーに送信される**ため、どのように扱われるかわからないまま危険にさらしてしまうリスクがあります。

● OK：学年や状況を一般化・抽象化

- 例：「小学3年生の男子児童で、落ち着きがないケース。どういった支援法が考えられる？」
- 例：「子ども同士でトラブルが起きがちな学級で、教師はどう対応すればよい？」
- 例：「校内研修用の事例として、特別支援が必要な子を想定し、一般的な対応策を挙げてほしい」

固有名詞や具体的な要素を伏せて、中核となる教育課題や状況のみを切り出して相談することで、個人情報流出のリスクを大幅に低減できます。

(2) 匿名化・要約化のコツ

● 名前やクラス名を入れない

- 例：教師がもつメモから固有名詞を削除し、
 - 「小学4年生の児童A」「体育の時間にトラブルになりがち」
 - 「下校時の不安が強い子がいる」といった形に置き換えてから質問する。

● 複数の事例を混ぜて“仮想ケース”にする

- 例：実際に2~3人の子が抱える問題点を整理し、ひとまとめでした“**仮想ケース**”として AI に相談。
 - これにより、一人ひとりが特定されず、より安全にノウハウを得られる。

● 機密度の高い情報は絶対入力しない

- 人事情報、成績評価の詳細データ、進路データなど、**外部に出すべきでない校務情報**は AI に入力してはいけません。学校や自治体のルールで明確に NG と定められている場合が多いです。

(3) 校内ルールや自治体ポリシーの確認

● 学校独自の AI 活用ガイドライン

- 多くの自治体や学校で、「**AI に入力してよい情報・NG 情報**」を含むガイドラインや内規が整備されつつあります。
- 「具体的な児童名の入力禁止」や「個人を類推できるデータを含めない」などの項目が明記されていることが多いので、必ず事前に確認しましょう。

●管理職や情報担当との連携

- 迷う場合は、自分の判断だけで突っ走らず、**ICT 担当や管理職**に相談するのがベスト。
- 「このレベルの情報が入力 OK か」「この行事情報はまだ非公開なのか」を事前に確認してから活用すれば、安全性が高まります。

■ポイント：個人情報保護は“絶対的優先事項”

AI を取り巻く仕組みは日々アップデートされており、「入力されたデータをどう扱うか」はサービスによって細かな違いがあります。しかし、それに関わらず、“**個人情報や校務上の機密は入れない**”という鉄則は揺るぎません。

1. NG 例を頭に叩き込む

- 子どもの個人名、成績、健康情報などは絶対入れない。

2. OK 例のパターンに慣れる

- 学年や性別、状況だけに留めた相談。

3. 二重チェックの習慣

- 入力前に「この情報が外に出ても問題ないか？」を自問する。

この3点を徹底すれば、**個人情報流出のリスク**を大幅に下げられます。

次の節(7-3)では、**著作権への配慮**について同様に具体例を挙げながら解説していきます。教師が教材作成などでAIを使う際に特に気をつけたいポイントを押さえましょう。

7-3. 著作権への配慮：創造性と正しい利用

■AIを使う前に、まずは著作権の基本を再確認

小学校で日常的に作成されるプリントや教材、学校だよりなどは、「**著作物**」としての性質をもつ場合があります。また、市販の書籍・教材や他者が作成した画像・文章を引用・利用するときには、必ず**著作権**を意識しなければなりません。

AIを活用すると、**既存の情報や文章を無断で再利用している可能性**があるため、従来よりも著作権侵害のリスクが高まるケースが考えられます。ここでは、**AI生成コンテンツを使用する際の注意点**や、教材づくりの基本的なルールを整理しましょう。

(1) 教材作成時の基本的なガイドライン

●最小限の引用と出典明示

- 例：国語の授業で文章を引用する場合、**引用部分を「」や段落でくくり、出典を明示**するのが原則。
- AIに教材文章を生成させる際にも、「この一文は実は有名な詩のフレーズと酷似している」というケースがあるかもしれません。
 - 教師が**二次利用のルール**（引用の範囲や出典表記など）をしっかりと確認し、必要なら**詩や文章を大幅に書き換える**か、引用部分を削除するなどの措置をとりましょう。

●市販教材の“そっくり引用”は NG

- AI に「市販教材の問題をアレンジして作成してほしい」と頼んだ場合、**元の教材をほぼコピー**した回答が返ってくる可能性があります。
- **市販の問題集や教科書に掲載されている問題**を、そのまま使うのは著作権侵害になりかねないので注意。
- 「アレンジして」「大きく表現を変えて」など追加指示を出しても、最終的に教師が**元の文章と比較・チェック**しなければ、安全とは言いきれません。

(2) AI で生成されたコンテンツを使用するときの注意

●「この文章はフリーで使えるの？」という不安

- AI が生み出した文章や画像の著作権はどのように扱われるか、現段階では**サービスや利用規約によって解釈が分かれる**ところがあります。
- 一般には、「AI が新規に生成したコンテンツは利用者に権利が付与される」形式を採用するサービスが多いと言われていますが、**細かな規約はサービスごとに確認**する必要があります。

●他者の著作物を含んでいる可能性

- 生成 AI が使う大規模データの中には、**既存の著作物**が含まれている可能性があり、AI の出力結果が**無意識に別の作品を流用**しているケースも完全には否定できません。
- 心配な場合は、**類似文章検索ツール**などで確認したり、文面を大きく改変するなど、著作権リスクを低減する工夫が望まれます。

(3) 校内での注意点と事例共有

●校内研修で事例ベースの学び合い

- 「AI に問題作成を頼んだら、市販教材の問題とほぼ同じだった」といったトラブル事例を**研修で共有**し、対策を練ることが大切。
- 教師同士で「これは OK」「これは微妙」と判断基準をすり合わせることで、**著作権侵害のリスク**を下げられます。

●デジタル教材の取り扱い

- 今後は、画像生成 AI と組み合わせて、挿絵や図を AI で作るケースも増えるかもしれません。
- **画像や動画の著作権**は文章以上に複雑な面があるため、校内ポータルなどで**使用規定や利用規約を随時アップデート**し、教職員全員が参照できるようにしましょう。

■ポイント：創造性を伸ばすためにも、正しい利用を

- **著作権を守る**ということは、**教育現場での「創造性」を尊重**することにもつながります。
- AI 生成の文章や画像を使うときこそ、**元となる著作物との類似や引用範囲**を意識しながら、**教師のオリジナルの創作要素**を加えていく姿勢が大切です。

- 「何でも自由に使っていい」わけではない、という意識を持ち続けることで、子どもたちにも著作権リテラシーを伝える良い機会となるでしょう。

〈次節へ〉

第7章の前半では、**個人情報の保護（7-2）**と**著作権への配慮（7-3）**を取り上げました。どちらも、教師が最優先で守らなければならない原則です。

次の節（7-4）では、**情報の正確性の確認**について解説します。AIの回答には誤情報や曖昧な部分が混じる可能性があるため、**ファクトチェックの習慣**が欠かせません。

7-4. 情報の正確性の確認：ファクトチェックの習慣化

■ なぜファクトチェックが必要なのか

生成AIは、膨大なデータをもとに「もっともらしい文章」を作り出す仕組みで動いています。しかし、**事実と異なる内容や曖昧なデータ**が含まれる場合も少なくありません。特に小学校の授業や校務では、**年号や地名、法制度、計算結果**など、誤ってしまうと学習や業務に大きな影響を与える情報が扱われます。

そこで重要なのが、**常にファクトチェックを行う習慣**です。AIが提案した情報はあくまで「たたき台」として捉え、**一次資料や信頼できる文献**と照合するステップを欠かさずに行いましょう。

(1) 誤情報・フェイク情報が混ざる可能性

● AIの限界：論理的に整合性を保ちつつ間違える

- 例：社会科の地理情報（人口、面積など）が古かったり、全く架空の数字が返ってきたりすることがある。
- 例：歴史の年号をAIに尋ねたら、もっともらしいが誤った数字で回答されるケース。

これらは**意図的なフェイク**というわけではなく、AIの内部処理が誤情報を“自然な形”で再生成してしまう仕組み上、十分にあり得る現象です。

● 具体的な事例を校内で共有すると安心

- もし実際に「**回答を信用して教材を作ったら、データが間違っていた**」といったトラブルが起きた場合、教師同士で早めに情報を共有し、**再発防止策**を検討することが大切です。

(2) 教師の二重チェックと複数ソースの比較

● 教科書や公的資料との照合

- 数値や統計、歴史年表などは、**必ず教科書や公的機関のサイト**を確認してから子どもに伝える。
- 例：理科での実験手順や材料の量なども、実際にやってみて違和感がないか検証する。

● 公式サイト・複数の文献にあたる

- 例：算数の難易度が高い問題でも、「本当に正しい解法か？」を別の問題集や同僚に相談して確かめる。
- AIの回答を全面的に信頼せず、**自分の経験・同僚の知恵も加えて判断**することで、誤情報に流されにくくなる。

(3) 児童への伝え方とメタ認知

● 「AI=正解ではない」という認識を教師が持つ

- 子どもたちに直接 AI を使わせるシーンは本ガイドでは想定していませんが、万が一子どもが AI の情報を見る場合もあるかもしれません。
- そのときに、「ここに書いてあることが必ず正しいわけではないよ」と教師が補足し、**誤情報を見抜く手がかり**を教えることが大切です。

● 教師自身のメタ認知が大切

- AI が示すアイデアを一度受け取り、「**本当に現場で成立する？**」「**公式資料や教科書と矛盾しない？**」と自問する習慣を身につける。
- この確認プロセス自体が、教師のリテラシーを高め、授業や校務への責任感につながります。

■ ポイント：情報は「必ずチェック」して使う

- **最終責任は教師が負う**という原則を忘れず、AI が提供する情報を**必ずファクトチェック**する。
- もし時間がなくても、**数字や年表、法令**などは最低限確認を怠らない。
- 誤った情報が混ざっていると気づいた場合は、速やかに修正し、必要に応じて上司や保護者にも報告する態勢を作ることが大切。

〈次節へ〉

情報の正確性を見抜く“ファクトチェック”は、教師が AI を使ううえで欠かせない視点です。次の節（7-5）では、**AI 利用の倫理的配慮**についてさらに掘り下げていきます。差別・偏見的な表現を排除するためのチェックや、子どもの多様性を尊重する姿勢を AI 活用とどう両立させるかを考えてみましょう。

7-5. AI 利用の倫理的配慮：教育者としての視点

■ AI は便利なツール、しかし教育者としての責任は重い

ここまで、個人情報や著作権、情報の正確性といった要素を確認してきましたが、それと同じくらい大切なのが、**教育者としての倫理観**です。AI は便利な道具である一方で、**差別や偏見的な表現を含む出力**が返される可能性がゼロではありません。

また、子ども一人ひとりの個性や多様性を大切にするために、教師があくまで「**人間的な判断と配慮**」をすることが不可欠です。AI に任せきりにせず、**常に教師の目と心**で子どもたちを支える姿勢を保ちましょう。

(1) 差別・偏見的表現の排除

● AI の回答にステレオタイプや差別表現が混ざるリスク

- AI は、大量のデータを学習しているため、その中に**差別的・偏見的表現**を含む可能性があります。
- 例：人種や性別、障がいに対する不適切な言葉づかいが“何となく”混入してしまうケース。

- 教師が内容をよくチェックし、問題があれば**修正または破棄**することが必要です。
- 学級通信や教材で使う場合は必ずフィルタリング
 - AI が生成した文章やイラストをそのまま学級通信やプリントに載せると、**意図せず差別的ニュアンス**が含まれているかもしれません。
 - 必ず「他の先生に一度目を通してもらう」「複数人で確認」などを行い、リスクを極力低くする工夫が大切です。

(2) 子どもの多様性への尊重

- 画一的な指導法に陥らないために
 - AI は「最も一般的な解決策」を提示しがちですが、それが**必ずしも全児童に適合する**とは限りません。
 - 発達障がいをもつ子や、家庭環境が特殊な子どもたちには、**より個別の配慮**が必要で、AI の提案をうのみにするのではなく、教師が現場で柔軟に調整する姿勢を保ちましょう。
- 児童の主体性・人格を尊重する
 - 教師が AI を使う際、子どもが「先生が全部 AI に任せちゃっている」と感じると、**不信感**を抱く可能性があります。
 - 「先生が自分を真剣に見てくれる」「人として理解しようとしてくれる」という信頼関係があってこそ、学習や指導がうまくいきます。
 - AI はツールにすぎず、**最後は人間としての共感や対話**が不可欠だという点を忘れないようにしましょう。

(3) 「AI 任せ」は避ける姿勢

- 教師が判断し、責任を持つ
 - AI が生成した教材や案内文の誤りや不十分さによって、児童や保護者が不利益を被った場合、**最終的な責任は教師や学校**にあります。
 - 「AI が言ったからいいだろう」ではなく、「**AI が言っていることを活かすかどうかは教師が決める**」というプロセスを明確に持ち続けましょう。
- 子どもの学びを AI に奪われないように
 - AI を導入することで「子どもの学ぶ機会」を損ねないか、常にチェックすることも大切です。
 - 例：発展問題を AI が簡単に解いてしまい、子ども自身の思考が浅くなる
 - 例：子どもに考えさせるプロセスをすっ飛ばして AI が回答を提示する
 - ガイドでは、基本的に子ども自身が AI を直接使うシーンは推奨していませんが、もし現場で試す場合は「**考えの補助具にすぎない**」という位置づけを徹底し、**子どもの思考主体**を確保しましょう。

■ ポイント：教育者として、人を育てる視点を忘れない

- 教育の本質は、「**子どもの成長を支える**」「**人としての尊厳を尊重する**」ことにあります。
- AI が提供する便利さや創造力を活かしつつも、教師自身が**子どもを理解し、共感し、対話する時間**をおろそかにしてはいけません。
- 差別や偏見、子どもの思考力の低下などのリスクを常に意識しながら、**教師としての責任と専門性**を生かしていきましょう。

〈次節へ〉

ここまで、**AI 活用で生じうる倫理的リスク**と教育者としての留意点についてまとめました。続く節（7-6）では、**リスク管理のための具体策**をさらに掘り下げ、日常的なチェックリストや校内研修の仕組み、トラブル発生時の対応フローなどを提案します。

7-6. リスク管理のための具体策

■ 「何かあってから」では遅い、事前の仕組みづくりを

AI 活用におけるリスクは、重大なトラブルが起きてしまうと学校全体に大きな影響を及ぼします。そこで必要なのが、**日常的な確認習慣**や**校内全体の仕組み**の整備です。ちょっとした取り組みを重ねることで、トラブル発生を未然に防ぎ、万が一のときにも迅速に対応できる体制がつくれます。

(1) 日常的な確認習慣

● 朝や終業時のチェック

- **端末・アカウントのセキュリティ**
 - 教師用 PC やタブレットを使い終わった後、ログアウトやパスワードロックを徹底する。
 - OS やセキュリティソフトの更新状況を確認し、古いバージョンを放置しない。
- **情報が残っていないかを最終確認**
 - AI に入力した文面を保存する場合は、**個人情報が含まれないか**再点検し、安全な場所に保管。
 - 不要になったテキストは削除するか、匿名化データだけ残すなどの工夫を行う。

● 会議や研修で AI を使う場合

- 事前に「入力してよい情報・NG 情報」や「入力前の再確認」を担当者に周知し、**個人情報の流出**が起きないようガイドラインを守る。
- 参加者全員がルールを再確認できるよう、**会議前にマニュアルを配布**するなどの仕組みを作る。

(2) 校内研修やマニュアルの整備

● ガイドラインを“生きたもの”に

- AI 関連のツールや機能は日々進化するため、**一度作った校内ガイドライン**を定期的にアップデートすることが大切。
- 「〇〇という新機能が登場したが、学校としてはどう扱うか？」などを**研修担当や管理職**と相談し、必要に応じてガイドラインを改訂。

● 定期的な校内研修

- **実例や疑問点を持ち寄る**研修会が有効。
 - 例：「こんな危ない入力をしてしまいそうになった」「回答が著作権的にグレーだった」など、実体験を共有し合う。
- ICT 担当や情報主任が中心となり、**事例ベース**で勉強することで、教師同士の意識が高まりリスクが下がる。

(3) トラブル発生時の対応フロー

● 問題の発見→即時中止→管理職へ報告

- 万が一、**個人情報**を誤って入力したことに気づいた場合、すぐに
 1. 利用を停止する
 2. ICT 担当・管理職へ報告
 3. 必要に応じて教育委員会や保護者へ説明というフローで対処する。

- **隠蔽や後回し**はトラブルを大きくするだけなので、早めの共有と適切な対策が不可欠。

● 再発防止策と検証

- トラブルの原因を整理し、**同じ誤りが起きないための改善**を校内で話し合う。
 - 例：プロンプト入力時に個人情報が混じらないよう、テンプレート化する
 - 例：機密情報に“要マスキング”ラベルを付ける仕組みを導入
- トラブル事例が学校全体で共有されれば、他の先生が同じ失敗を回避できる。

■ ポイント：チームでリスクを把握し、支え合う

AI 活用のリスク管理は、**教師一人の努力**だけでは限界があります。

- 学校全体で「**入力 NG 情報一覧**」を掲示したり、日頃から「これって入力してよかったっけ？」と気軽に相談できる雰囲気を作ったり、**チーム体制**でバックアップするのが理想的です。

- 管理職・ICT 担当・情報セキュリティ担当などの役割分担をはっきりさせ、教師みんなが安心して相談できる仕組みを整えることが重要です。

〈次節へ〉

ここまで、**日常的なチェック習慣**や**校内研修・マニュアル整備**、**トラブル対応フロー**を中心に、AI活用におけるリスク管理の具体策を見てきました。次の節（7-7）では、第7章全体を振り返りながら、**バランスの取れた活用**に向けて改めて総括します。教師が持つ責任と専門性をどのように生かし、安全・安心にAIを活用すればよいかを再確認していきましょう。

7-7. まとめ：バランスの取れた活用に向けて

■ 安全と利便性を両立させるために

第7章では、AI活用における様々なリスクや注意点を見てきました。

- 個人情報の保護（7-2）
- 著作権への配慮（7-3）
- 情報の正確性の確認（7-4）
- 倫理的配慮（7-5）
- リスク管理の具体策（7-6）

こうした要素は、教師として「**子どもを守る責任**」「**教育の質を担保する責任**」を果たすうえで、どれも**欠かせないポイント**です。AIの利便性を享受するには、これらの原則をしっかり押さえ、**安全面・倫理面**に抜かりのない運用をすることが前提となります。

(1) 個人情報の保護を最優先に

- いかにAIが便利であっても、子どもや保護者、学校関係者の**個人情報を誤って入力**するような行為は絶対に避ける。
- 仮名化・要約化の徹底や、抽象化した相談内容に留める工夫を習慣づければ、トラブルの大半は未然に防げます。

(2) 著作権と正確性のケアが子どもを守る

- 他人の著作物を無断利用しないことはもちろん、AIから得た文章・画像が既存のコンテンツを盗用している可能性も**ゼロではない**と心得ましょう。
- さらに、AIが生成する情報には誤りが含まれる場合があり、ファクトチェックの手間が不可欠です。**教師が確認を怠れば、子どもたちに誤情報を与えること**になりかねません。

(3) 教師の専門性と倫理観が要

- AIに頼りきった指導は、子どもの学びを狭めたり、適切でない対応を行う危険があります。
- 差別・偏見表現の排除や、子どもの多様性への配慮などは、**教師の現場感覚と人間的な判断**が不可欠。
- 「どう使うか」を決めるのはあくまで教師であり、最終責任もまた教師自身にあると認識しておきましょう。

(4) 仕組みづくりでリスクを抑える

- **校内研修やガイドライン**を“生きたもの”として活用し、教師同士で情報を共有する。
- トラブル発生時にはすぐ報告できるフローを整備し、同じミスを繰り返さない工夫を。
- 普段から「これ入力しても大丈夫？」と同僚に声をかけ合うなど、**職員室内のコミュニケーション**も大切です。

■ 結論：バランスの取れた活用こそ、教育の質を高める

AI は、教師の負担を軽減し、授業準備や校務の効率化をサポートする**強力な道具**です。しかし、**安全面・倫理面をおろそかにすると、かえって大きなトラブルを招くリスク**があります。

- 「**効率化**」と「**教育の質の維持**」
- 「**新技術への挑戦**」と「**現場の安心・安全**」

これらを両立するためには、**教師が主体的に、リスクを理解したうえで AI を活用する意識**が不可欠です。適切にルールを守りながら AI を使いこなせば、子どもたちにとっても、より豊かな学習体験を提供できる可能性が大いに広がります。

〈次章へ〉

これで第7章「注意点とリスク管理」は終了です。次章（第8章）では、本ガイド全体の締めくくりとして、**Q&A集**や**今後の展望**などを取り上げる予定です。ぜひ、ここまで学んだ**安全・モラル面**のポイントをしっかりと押さえたうえで、**明日からの実践**に生かしてみてください。

第8章：Q&A 集

～現場の疑問を解決～

8-1. Q&A：ChatGPT の導入や料金に関する疑問

ここまでガイドを読んで、「実際に ChatGPT を使ってみたい」と思った先生方も多いかもしれません。そこでまず気になるのが「料金プラン」や「導入環境」です。以下の Q&A を参考にして、自分の状況に合った方法を検討してみましょう。

Q1：「ChatGPT にはどんな料金プランがあるの？」

A：OpenAI 社が提供する ChatGPT には、ざっくり**無料版・Plus・Pro・Team・Enterprise**といった複数のプランがあります。主な概要は以下のとおりです（2025/1/30）。

1. 無料版（\$0/月）

- GPT-4 の mini へのアクセス、標準言語モード
- 一定の利用制限があり、最新・高機能のモデルは使えない場合が多い
- 「とりあえず試してみる」には十分だが、繁忙期はアクセス制限がかかるケースも

2. Plus（\$20/月）

- 無料版より優先的にアクセスでき、より**高性能な言語モデル**を利用可能
- メッセージングやファイルアップロードに関する制限がやや緩和
- 小規模・個人利用で「もう少し自由に使いたい」人向け

3. Pro（\$200/月）

- さらに高度な GPT への“無制限アクセス”が含まれるとされる（利用ポリシーの詳細は要確認）
- 大量のメッセージや高度な連続対話を想定するユーザー向け
- 教育現場だとコスト面で導入ハードルが高い印象

4. Team（\$25/ユーザー/月・年額換算もしくは\$30/ユーザー/月）

- 教師数名や学年チームで契約し、**共同作業**がしやすくなるプラン
- プロジェクトベースでワークスペースを作り、テンプレートやトレーニングデータを共有可能
- 校内研修や学年団で使うならこのプランを検討してみるのも一手

5. Enterprise（個別見積）

- 大規模導入を想定。**管理者権限**やドメイン認証、アナリティクスなどが充実
- 大人数の教師がまとまった形で活用する場合や、自治体レベルでの導入を検討するなら候補

補足：実際の価格・機能は時期や地域によって変動する可能性があります。最新版の情報や利用規約は、OpenAI 公式サイト等で随時ご確認ください。

Q2：「学校で導入するには誰が費用を負担するの？」

A：一般的には、**教師が個人アカウントで契約するか、または学校・自治体としてまとめて契約するか**の二択です。

- **個人契約：**自分のカードやアカウントで Plus などを契約し、個人的に使う。校務端末での使用はネットワークポリシーに注意。
- **学校契約：**管理職や教育委員会の承認を得て、Team プランや Enterprise プランを導入し、職員全体が安全に利用できる環境を整える。

どちらにしても、**事前に校内規定や自治体の方針を確認し、費用負担やセキュリティ面をクリアにする必要があります。**

Q3：「無料版と有料版の違いはどれくらい大きいですか？」

A：無料版でも“とりあえず触ってみる”には十分ですが、**混雑時にアクセスしにくい、最新モデルの利用制限**がある、といった制限があります。

- **無料版のメリット：**
 - 予算ゼロで試せる
 - 基本的なテキスト生成や短い対話には十分
- **有料版（Plus/Pro）のメリット：**
 - 空いているサーバーに優先接続できるので繋がりやすい
 - 高度なモデルで**長文生成や複雑な指示**が安定して使える
 - メッセージ数やファイルアップロード等の制限が緩和される

学校での本格的な運用を視野に入れるなら、**予算と使用頻度**に応じて Plus や Team プランを検討する価値があります。

Q4：「無料版を授業で使おうとしても問題ありませんか？」

A：小学校の授業場面で**子どもが直接 AI に触れる**には、著作権・個人情報・モラル指導など、数多くの課題があります。本ガイドでは、**教師が裏方で使う**ことを基本想定しています。

- **無料版を教師がバックグラウンドで教材作成に使う：**OK（ただし校内ポリシーを遵守）
- **子どもに無料版の画面を見せる：**学校ネットワーク・ガイドラインの制限がある可能性が高く、安全面のハードルが高い

- **結論:**「教師が舞台裏で利用→教材やアイデアを仕上げる」のが一番無難

Q5: 「支払いはどんな手段がある? クレジットカード以外は?」

A: ChatGPTの有料契約では、**クレジットカード決済**が主流です。学校契約の場合も法人クレジットが使われることが多いようです。

- **個人契約のケース:** 個人名義のクレジットカードで月々の支払い。
- **学校や自治体としての契約:** 法人カードや請求書払いに対応している場合もあるが、詳細は OpenAI (または代理店) の問い合わせ窓口で要確認。

もしクレジットカードが用意できない状況なら、**無料版のみを運用**するか、別の手段 (PayPal やその他の決済方法) に対応しているか問い合わせる必要があります。

■ **まとめ:** コストと運用方法を見極めながら導入を検討しよう

- **無料版であっても教材アイデアや行事準備で十分役立つ**場合が多い。
- 学校全体や学年団で使うなら、**Team プラン**などの共同利用プランが便利だが、予算管理や管理職の承認が必要。
- **Pro や Enterprise** は大規模な利用を想定しており、小学校段階で導入するかどうかは慎重に検討すべき。
- いずれにしても、導入前に**校内ポリシー・自治体の方針・セキュリティ要件**を確認し、管理職や ICT 担当と連携しておく心安いです。

これらの疑問と回答を踏まえ、教師それぞれの立場や学校事情に合った形で ChatGPT を導入してみるのも一つの選択肢です。次節 (8-2) では、**今後の展望**を交えながら、さらに広い視野で AI の可能性を考えていきましょう。

8-2. これからの展望: AI が広げる教育の可能性

■ **新機能・新技術が続々登場する AI の世界**

ここまで扱ってきた ChatGPT や類似ツールは、あくまで**現時点でのバージョン**にすぎません。AI は日進月歩で進化しており、今後はさらに**画像や音声、動画**などの連携がスムーズになる“マルチモーダル AI”や、**学習履歴を反映したパーソナライズ機能**などが普及する可能性があります。たとえば:

1. 画像生成 AI との統合

- 教材の挿絵や図解を自動生成し、文章と同時に出力する機能
- 理科や社会の“擬似観察画像”を教材化するなどの応用が考えられる

2. 音声会話インターフェイス

- マイクに話しかけるだけで AI が回答し、必要ならテキスト化・翻訳もしてくれる

- 外国語活動や保護者向け多言語対応に役立つ場面があるかもしれない

3. 学習履歴の蓄積とリアルタイムフィードバック

- 児童が過去に苦手だった単元を AI が把握し、教師が裏で参照して補充プリントを迅速に作成
- ただし、**個人情報管理**や**子どもの思考力を奪わない工夫**が必須

(1) 児童への直接活用は慎重に

● リスクとチャンスが背中合わせ

- AI が高度化するにつれ、**子ども本人が直接 AI を使う**学び方に注目が集まるかもしれません。しかし、本ガイドで繰り返し述べているように、小学校段階での直接利用には**情報モラル・プライバシー保護**の課題が山積です。
- 今後、自治体や文部科学省の方針が整備され、**安全な学習環境**が保証されれば、探究学習や個別最適学習の一環として子どもが AI を活用するシーンもあり得るでしょう。しかし、現時点では**“教師が裏方で使う”**方法が最も安全と考えられます。

● 見極めと段階的導入の必要性

- まずは**教師が十分に使い慣れ、安全面に精通**したうえで、学校や保護者と相談しながら、将来的に子どもに使わせるかどうかを段階的に検討する流れが望ましいでしょう。

(2) 教育の質をどう高めるか

● 「効率化」だけで満足しない

- AI を導入するメリットの一つは、**校務や教材作成の効率化**です。しかし、教師が“空いた時間”で何をするかが本質的に重要。
- その分、**授業で子どもと向き合う時間**を増やしたり、より丁寧な個別指導を行うなど、**教育の質**を上げる方向へ再配分できると理想的です。

● 新しい授業デザインの可能性

- AI から多様なアイデアを得ることで、**教科横断的な学習**や**発達段階に合わせたステップ教材**など、これまで思いつかなかった授業デザインが見えてくるかもしれません。
- 教師同士でアイデアを共有し合い、**新しい教育の形**を切り拓くきっかけにしていくことが大切です。

(3) 教師が学び続ける意義

● 技術は変化するが、根本は変わらない

- ChatGPT などは今後もアップデートを重ね、名称や機能が変わっていく可能性があります。
- しかし、「**子どもを理解し、成長を支える教師の姿勢**」や「**安全・倫理を最優先する責任**」という根本は変わりません。

● 学び続ける教師＝子どものモデル

- 教師が「新しい技術をどう使いこなし、どう見極めるか」の姿は、そのまま子どもにとっての学びの手本です。
- 「AI という新しいツールに対して柔軟・積極的に学び、必要に応じて批判的に判断する」態度は、**情報化社会を生きる子どもに不可欠なスキルのロールモデル**とも言えます。

■ まとめ：未来へ一歩踏み出す勇気

AI 技術はこれからさらに進化し、教育現場にも多様なインパクトをもたらすでしょう。

- リスクや課題は尽きませんが、**教師が学び続ける姿勢**と**校内での情報共有**を大切にすれば、子どもにとって豊かな学びのチャンスを広げる可能性が大いにあります。

- 本ガイドで紹介したように、**安全・倫理面を最優先**しながら、**日常の業務や授業デザイン**で AI を上手に活かしてみてください。

- 新しいテクノロジーと協調しつつ、“人”としての温かい関わりを軸に置く教師こそが、子どもたちの未来を拓く存在になれるはずです。

次の節（8-3）では、本ガイド全体をまとめるとともに、**明日から実践しやすいチェックリストや行動例**を提示します。ぜひ最後までご覧いただき、先生方の実践に活かしていただければ幸いです。

8-3. 本ガイド全体のまとめ

■ 1. チェックリストで再確認

ここまで、AI を「授業準備」「校務効率化」「児童指導のヒント」などに生かす具体的な方法を見てきました。しかし、導入時には様々な注意点やリスクもつきまといます。最後に、**5つのチェックポイント**をあらためて提示します。

【AI 活用前の 5 つのチェックポイント】

1. **入力する情報に個人情報に含まれていないか？**
 - 児童や保護者の氏名、成績、家庭事情などがそのまま入っていないか要確認。
2. **著作権に配慮しているか？**
 - 他の教材や著作物を無断で引用していないか？
 - AI が作った文章・画像が既存の作品をコピーしていないか、大丈夫か？
3. **情報の正確性をどのように確かめるか？**
 - 数字・データ・年号などは公式資料や教科書と照合する。
 - 必要なら同僚に相談し、ダブルチェックを行う。
4. **AI が差別的・偏見的表現を含んでいないか？**
 - 教材や学級通信に使う場合、文章全体をよく読み直す。
 - 微妙な表現があれば、思い切って修正・破棄する判断も。

5. 最終的な判断を教師自身がしているか？

- 「AI の提案＝正解」ではなく、あくまで選択肢の一つ。
- 現場で子どもの顔を見ながら調整するのは教師の専門性。

■ 2. 明日からできるアクション

「ここまで読んだけど、まずは何をすればいい？」という方に向けて、いくつかの小さなステップを提案します。

1. 学級通信の一文を AI に作らせてみる

- 「年度末に保護者へのコメントを書きたいが、挨拶文のバリエーションを増やしたい…」
- AI から提案を受け取り、自分の言葉にアレンジして仕上げる。

2. 授業導入アイデアを AI に相談

- 「小学4年生の国語で、物語文の導入として興味を惹くエピソード例を3つ提案してほしい」
- 現場で実際に使いやすい内容かどうか、確認してからアレンジ。

3. 会議や行事準備の議題リストを AI に作らせる

- 「学年会議で話し合うべき項目を洗い出して」と頼むだけでも、抜け漏れを防ぐきっかけになる。

4. 同僚に成功体験をシェア

- 「こんな使い方ができたよ」「実はこんなところでつまづいた」と話し合うことで、校内でノウハウが蓄積される。

■ 3. このガイドのキーメッセージ

1. 「安全・モラルを最優先」する

- 個人情報、著作権、誤情報、差別表現…どれも見逃せない要素。
- 校内や教育委員会のガイドラインを守りつつ、迷ったら管理職や ICT 担当に相談する。

2. AI は道具、最終判断は教師

- AI を使うメリットは、業務効率化やアイデア収集など。
- しかし、子どもにとって最適な授業・教材に仕上げるのは教師の専門性があってこそ。

3. 教師自身が学び続ける姿が、子どもへの最高のメッセージ

- 新技術への理解や扱いを更新し続ける努力を、子どもたちは自然に感じ取り、学ぶ。
- 「先生も勉強しているんだな」とわかれば、子どもたちも安心して新しい物事に取り組める。

8-4. エピローグ：学び合う職員室から（架空の事例）

■ 教師同士が学び合うことが、子どもの力を伸ばす

「AI って思ったより便利だけど、やっぱり不安もあるよね」

「この前、学級通信の挨拶文を AI に考えてもらったら、予想外にいい雰囲気の記事が出てきたんだよね」

「でも、うちのクラスは保護者からの了承が必要だし、個人情報入力には気をつけなきゃ」

——そんな声が行き交う職員室は、**学び合いの場**として機能している証拠かもしれません。忙しい日常の中でも、**自分の実践例やちょっとした失敗談を共有**し合うことで、**お互いの知見が積み重なり**、**学校全体の力**となっていくます。

■ 新しい技術と共に前進するために

- AI の進化は急速で、数か月後には今と違う機能が登場している可能性があります。
- だからこそ、**教師が学び続ける姿勢**と、同僚同士で気軽に情報交換できる**雰囲気**が大切です。
- 教科や学年を超えて協力し合えば、思わぬところで**効率化**や**新たなアイデア**が生まれ、結果として子どもたちの学びがより豊かなものになるでしょう。

■ AI 時代だからこそ、教師の役割が重要に

「AI が代わりにやってくれるなら、教師はいらないのでは？」という極端な意見が、世間で語られることもあります。しかし、本ガイドで繰り返し強調してきたように、**人として子どもを見つめ、成長を支えるのは教師でしかできない仕事**です。

- AI は“強力な道具”である一方、「子どもに寄り添う」「自分なりの表現で励ます」といった**人間的な繊細さや共感**は担えません。

- だからこそ、**教師が AI を賢く使いこなす**、危険を回避しながら子どもの学びをデザインしていくことが、これからの教育の鍵になっていくのです。

■ 最後に：「やってみよう」の気持ちを大切に

「ちょっと難しそう」「危なそう」と尻込みしてしまう気持ちもわかります。しかし、**まずは小さな一歩から試してみれば**、意外なほど時間が浮いたり、新しいアイデアに出会えたりするかもしれません。

- 学級通信の一文

- 会議の議題リスト

- 授業の導入アイデア

どんなに小さなことでも、成功体験が積み重なれば、自信も生まれてきます。

■ エピローグに寄せて

本ガイドを通じて得られたヒントが、先生方の「明日、ちょっとやってみようかな」という勇気につながれば幸いです。学校全体で情報をシェアし合い、**リスクに注意しながらも前向きに AI を活用すれば**、教師の時間とエネルギーをより**本質的な教育活動**に注げるようになるでしょう。

- 子どもたちの未来のために、

- 教職員全体の働き方改革のために、
 - そして教師自身が学び続けるために、
- 新しい一歩を踏み出す先生方を、心から応援しています。